

章我亦且煢
鶴歸兮智者
堂

天懷雖殊
後斯契庶
不忘

德鏡撰

葦林軒賦呈大邨侯
廣瀨達



平成26年度 咸宜園教育研究センター特別展

漢詩人

廣瀨
法意





永邨寫

表紙写真：廣瀨淡窓肖像画 柏木蜂溪画 平野五岳賛 公益財団法人廣瀨淡窓資料館蔵
 華林軒奉陪大村侯作 廣瀨淡窓書 日田市蔵
 中表紙写真：咸宜園絵図 長岡永邨画 公益財団法人廣瀨資料館蔵

いあいさつ

今回の特別展は、「漢詩人 廣瀬淡窓」をテーマとしました。

淡窓は儒学者として、また近世日本最大規模の私塾「咸宜園」を開塾した教育者として知られていますが、さらに江戸時代後期を代表する漢詩人としても名を馳せた人でした。

大坂で出版された淡窓の漢詩集『遠思楼詩鈔』は、咸宜園門下生をはじめ多くの人々に愛読され、日田の地をほとんど離れることがなかった淡窓の名を全国に知らしめることとなりました。現在確認されている『遠思楼詩鈔』の版数は一八版にものぼり、当時のベストセラーとなっていたことがうかがえます。

淡窓は咸宜園における教育において、詩作、つまり漢詩を作ることが重要なカリキュラムの一つとして位置付けていました。

咸宜園の門下生で福岡藩医学校「賛成館」を設立した武谷祐之が書き残した「南柯一夢」には、咸宜園で行われた教育の中で、漢詩について質問に応じたり、門下生の漢詩を推敲したりしていたことが記されています。また、試業（試験）においても漢詩が課題のひとつとなっていました。この試業などの学習成績をもとに毎月公表されていた「月旦評」の査定においても詩作が考慮されていました。

淡窓は月旦評に見られるような徹底した実力主義により門下生を切磋琢磨させ勉学に励ませますが、一方では、良い点数を取ることを目的とする教育につながるのではないかとの危惧もしていました。そこで淡窓は日常生活や自然・風景を題材にして詩作をすることで、豊かな感受性が育まれるという強い信念の下、漢詩教育を行ったのです。

本特別展では、淡窓が漢詩人として成長していく過程や、漢詩を詠んだ場所とその漢詩を中心に紹介しながら、漢詩を通じて淡窓と交流のあった文人についても紹介いたしました。

おわりに、本展の開催に当り御協力を賜りました公益財団法人廣瀬資料館や咸宜園門下生の御子孫各位、貴重な資料の御出陳を快諾いただきました方々、ほか多くの関係者の皆様に感謝の意を表します。

平成二六年季秋

咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗 俊

目次

ごあいさつ 咸宜園教育研究センター名誉館長 後藤 宗俊	
はじめに 淡窓を育んだ廣瀬家	1
淡窓を育んだ廣瀬家	2
淡窓以前の廣瀬家の文化活動	2
廣瀬家の人々	4
第一章 漢詩人廣瀬淡窓の誕生	5
淡窓誕生と家内教育	6
漢詩との出会い	6
淡窓の詩風	7
淡窓の詩論	8
廣瀬淡窓の足跡と詩作	10
文人との交流	13
淡窓の交流関係	14
菅茶山とは	14
淡窓と茶山の関わり	15
咸宜園蔵書に見る茶山の著作	15
頼山陽とは	16
淡窓と山陽の関わり	17
日田に伝わる山陽のエピソード	17
交流のあった文人たち	18
咸宜園教育における詩作（遠思楼詩鈔と宜園百家詩）	19
咸宜園教育における詩作	20
『遠思楼詩鈔』の刊行	20

『宜園百家詩』の刊行	21
詞華集への掲載	22
大詩人廣瀬淡窓の最期	22
出品資料目録・解説	24
主な参考文献	35
漢詩人廣瀬淡窓関連略年表	36
凡例	
一 本書は、平成二六年九月一日（月）～九月三〇日（火）まで、咸宜園教育研究センターで開催する特別展「漢詩人廣瀬淡窓」の展示解説書です。	
二 本展の企画及び本書の執筆・編集は主に溝田直己が行い、吉田博嗣・原田弘徳が補佐した。なお、第一章の「漢詩との出会い」「淡窓の詩風」「淡窓の詩論」は深町浩一郎（研究員）が作成した。	
三 出品作品の写真等は、所有者及び資料所在地等の関係機関より借用し、その他の写真は長谷川正美（雅企画）と溝田直己が撮影した。	
四 出品作品の写真は、巻末の出品目録・解説にすべて掲載した。本文中の図版には、出品作品の写真（一部）及びその他の写真を掲載した。	
五 下記の各位・機関の協力を得た。記して謝意を表します。	
公益財団法人廣瀬資料館、公益財団法人亀陽文庫能古博物館、公益財団法人頼山陽記念文化財団、頼山陽史料資料館、一般財団法人頼山陽旧跡保存会、京都大学総合博物館、大阪府、広島県立歴史博物館、大分県立先哲史料館、光善寺、住吉神社、英彦山神宮、高住神社、廣瀬貞雄、原田俊隆、廣瀬洋一、園田大、大野雅之、久下実、西村直城、花本哲志、木屋陽子、櫻井みどり、白石博子、椋本知佳（順不同・敬称略）	

休道他鄉多苦辛
同袍有友自相親
柴扉曉出寒如雪
君汲川流我拾薪

桂香齋雜詩 建



はじめに 淡窓を育んだ廣瀨家

近世日本最大規模の私塾を開いた廣瀨淡窓は天明二年（一七八二）、幕府直轄地である日田の地において、豆田の豪商 廣瀨家第五世三郎右衛門貞恒（長春庵桃秋）の長男として生まれました。

淡窓は伯父で俳人としても著名であった第四世平八（貞高、秋風庵月化）や同じく俳人で読書家、また小説も著した父三郎右衛門の下、文化的環境の中で育まれました。



廣瀨家北主屋

淡窓を育んだ廣瀨家

廣瀨淡窓は天明

二年（一七八二）

四月一日に、豊

後国日田で商家を

営む博多屋三郎右

衛門貞恒の長男と

して生まれました。

通称を寅之助、次

いで玄簡、長じて

求馬と称し、名は

始め簡、後に建、字は廉卿、後に子基と改めまし

た。号は淡窓が最も著名ですが、青溪・荅陽・遠

思楼主人等と号しました。

日田は江戸幕府の直轄地であり代官所が設置さ

れ、豆田町・隈町には九州諸藩の御用達を勤める

商家が多く存在しました。淡窓の実家である廣瀨

家もその商家の一つでした。廣瀨家の先祖は武田

信玄の家臣であった廣瀨郷右衛門の弟、将監正直

の子孫といわれていますが詳しくはありません。

廣瀨家の家伝によると、五左衛門正直（日田廣瀨

家第一世）が延宝元年（一六七三）に筑前国（福

岡県）博多より日田へ移住したといわれ、初めは

堺屋と称し、後に博多屋と名乗りました。この頃

はどのような商業活動を行っていたかは明らかで



廣瀨家南主屋

五左衛門の孫にあたる廣瀨家三世久兵衛の頃より、家業を拡張し、代官所にも出入りするようになりました。また久兵衛は俳諧を好み桃之と号

しました。その久兵衛には五人の子供がおり、その

長男が淡窓の伯父である平八（貞高）、次男が

淡窓の父である三郎右衛門（貞恒）でした。

平八は延享四年（一七四七）、三世久兵衛の

長男に生まれ、一八歳の時に代官所に初めて出仕

し、当時の日田代官であった揖斐十太夫（後に西

国筋郡代に昇格）に目をかけられ、近侍の一人に

加えられ、「仲」という姓を賜るほど寵遇を受け

ました。明和六年（一七六九）には、岡・杵築・

府内三藩の御用達を命ぜられ、これが廣瀨家にと

つて諸藩の御用達を勤めた始まりであり、この後

蓮池藩・対馬藩（田代領）の御用達を勤めること

となりました。平八が父久兵衛の跡を継いで第四

世となったのは、安永元年（一七七二）の二六歳

の時でしたが、平素から多病の上、俳諧に専念す

る心が強くなり、天明元年（一七八一）三五歳で

家督を弟の三郎右衛門に譲り、堀田村に隠棲して

「秋風庵」を営み、文人生活に入りました。

三世久兵衛の次男であり、平八の弟であった

三郎右衛門は宝暦元年（一七五一）に生まれまし

た。一四歳の頃より兄・平八を助け代官所に出仕

し家業を助けていましたが、天明元年（一七八一）、

平八の隠居により家督を譲られて、第五世となり

ました。跡を継いだ三郎右衛門は代々の代官によ

く仕え重用され、新たに肥前鹿島・大村藩の御用達となり、大いに家業を發展させました。

淡窓以前の廣瀨家の文化活動

日田代官所（西国筋郡代）が置かれた日田を中心に多くの幹線が整備され、代官の赴任に伴う武士や大名配下の武士、商人の往来に加え、文人墨客が多数来訪する町でした。

このように人の交流がさかんであった日田には、江戸の文化が代官所役人の異動に伴い流入し、長崎からも多くの文物がもたらされ、山間部でありながら文化的に繁栄することになりました。経済的に成功を収めた日田の商人たちは、文化活動にも取り組み、儒学・画・和歌・俳諧・書画・華道・茶等が大いに流行していました。なかでも廣瀨家においては三世久兵衛が俳諧を好み、俳号を桃之と名乗ったことが伝わります。

第四世である廣瀨平八は、父・久兵衛に手ほどきを受けて、俳諧に親しみ次第に頭角を現していききました。

● 秋風庵月化Ⅱ廣瀨平八

俳号を初めは桃潮、次いで静斎、のちに月化または秋風庵と称しました。一八歳の時、日田を訪れた八千房舎袴に入門し、また二〇歳の時に俳諧好きの揖斐郡代のお供で、江戸の著名な俳人松本

竿秋を訪ねて以降、竿秋にも師事するようになりました。

天明元年（一七八一）、三五歳の時に家督を

第三郎右衛門に譲り、自身は堀田村に隠棲して

「秋風庵」を営み、俳諧三昧の生活を送りました。秋風庵とは、松尾芭蕉の門人である雪中庵蓼太から庵開きの祝いに贈られた芭蕉翁の自画像「あかあかと日はつれなくも秋の風」に因んで名付けられたものです。

その後も月化は俳諧に精進し、その名を俳壇において轟かせ、その俳文は芭蕉翁の倣をよく写し、多くの俳人たちが秋風庵を訪ねました。月化の著述に『秋風庵月化発句集』、『秋風庵文集』の各二巻があります。

月化は文政五年（一八二二）、七六歳で秋風庵において没し、大超寺に葬られました。現在も史跡咸宜園跡の敷地には月化が建てた秋風庵と俳句の碑が残っています。その碑には「浮世とは何て云うたぞ初桜」の一句が彫られており、月化の面影を今も感じることができます。



秋風庵月化肖像画

●長春庵桃秋Ⅱ廣瀨三郎右衛門

天明元年（一七八一）、廣瀨

三郎右衛門は兄

平八（秋風庵月化）より家督を譲られ、第五世

になります。三郎右衛門は、廣瀨淡窓の父です。名を貞恒、字は君亨、俳号を桃秋、又は周山、二

江亭長春庵とも称し、兄月化の死後は二世秋風庵とも名乗りました。桃秋は、幼い頃より学問を愛し、読書を好む少年でした。父久兵衛は、そのような桃秋に対して学問に興味を持ち、世間のことに疎くなることを恐れ、読書を禁止しました。

一八、一九歳の頃には父に見つからないように屏風の中に隠れて本を読んでいたところ、その燈火の影が天井に映って父に叱られたことが度々あったといえます。桃秋は家業の傍ら、俳諧はもちろ

んのこと、読書を好み、和漢の書を読み漁る中、時には子ども達を集めては書を教えていたとい

ます。また自ら小説を著し、現在廣瀨家には『箒木』という小説十五冊が現存しており、出版の準備をしていたものがあります。

桃秋は兄月化の死後、秋風庵を長春庵と改称して俳諧にも精進しました。

天保五年（一八三四）、桃秋は八四歳で没し、大超寺に葬られました。桃秋は石松町に観音堂（現



長春庵桃秋肖像画

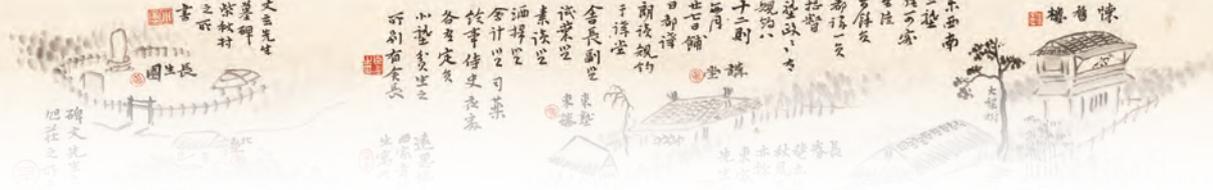
在は改築）を建立したり、大原神宮寺門外に小堂（現存せず）を建てて弥勒菩薩を安置するなどその信心深さが伝わってきます。

このように廣瀨淡窓が私塾咸宜園を開き、また漢詩人として名を成した背景には、淡窓の生まれした廣瀨家には文化的環境が育まれており、読書家で小説も著した桃秋を父とし、俳人の月化が伯父であったことが大きく影響したと考えられます。



額「心高身低」（廣瀨家家訓）

廣瀨法意



はじめに●淡窓を育んだ廣瀬家

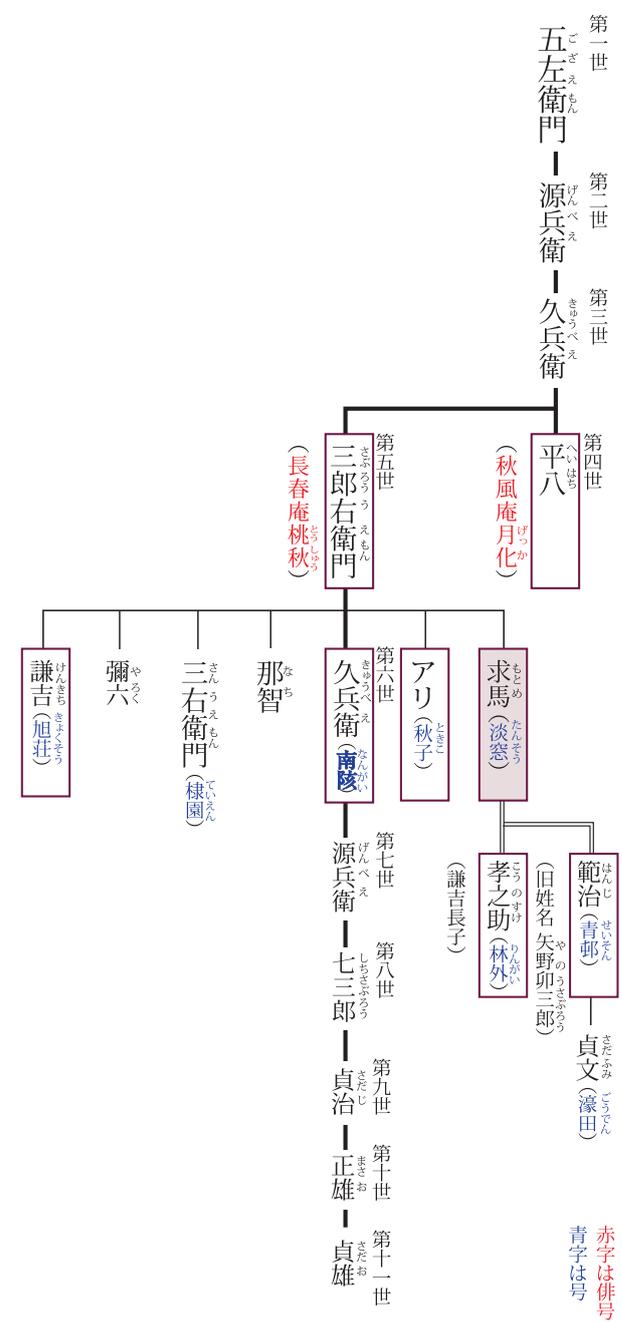
廣瀬家の人々

廣瀬家には逸材が多く、淡窓を含めた廣瀬家の八人は廣瀬八賢とよばれています。伯父月化と父桃秋は著名な俳人でした。仏への信仰心が篤く、自らの命と引き換えに淡窓の病氣平癒を祈った妹秋子は女官として宮中に仕えました。弟の久兵衛は大規模土木開発を手がけ諸藩の財政再建にも貢献しました。また咸宜園を継いだ弟の旭荘と養子の青邨、林外は儒学者として活躍しました。



廣瀬家北家側

廣瀬家略系図 ※太枠は廣瀬八賢



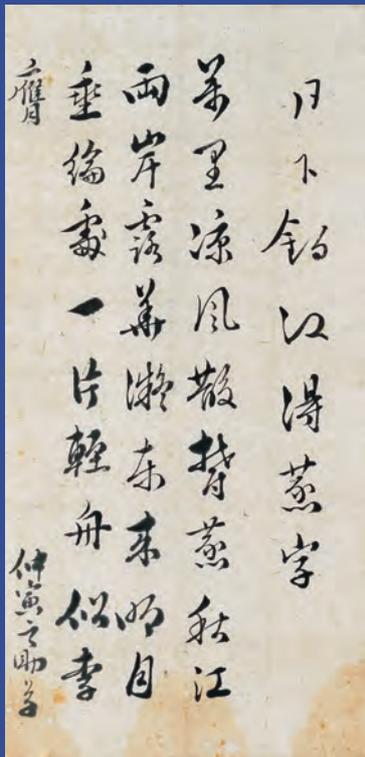
廣瀬八賢 (廣瀬家には逸材が多く「淡窓」を含めた廣瀬家の八人は廣瀬八賢と呼ばれています。)

月化	
桃秋	
淡窓	
秋子	
久兵衛	
旭荘	
青邨	
林外	



休道他鄉多苦辛
同袍老友自相親
柴扉曉出寒如雪
長汲川流我拾薪

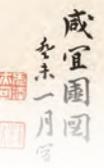
桂香齋雜詩 建



淡窓少年期の書

第一章 漢詩人 廣瀬淡窓の誕生

淡窓は廣瀬家における家内教育と天領・日田に來訪した文人たちの指導を受けて成長して行きます。松下西洋の薰陶をうけて漢詩を学び、一二歳の頃には一日に漢詩一〇〇首を作り、高山彦九郎から稱賛されました。その後、淡窓は福岡の亀井塾において南冥・昭陽父子の元で学び、学問・漢詩文について多大なる影響を受けます。しかし病により日田に歸郷して後は独学で学び、教育者として独立、漢詩人としても独自の詩風・詩論を展開しました。



淡窓誕生と家内教育

天明二年（一七八二）四月一日、淡窓は廣瀨家第五世である三郎右衛門（桃秋）とユイ（筑後吉井町祇園社別当東光寺円乘律師の娘、後藤氏）の長男として生まれました。淡窓は二歳から六歳まで、堀田村の秋風庵において伯父である月化夫妻のもと育てられました。月化の薫陶を受けて二歳で俳諧を始めた淡窓は、六、七歳の頃まで亀林という号を用いました。

天明七年（一七八七）の淡窓六歳の時、桃秋から書道を習いはじめ、桃秋の手ほどきのもと淡窓は、「仁慈」という二字を書して、大原八幡宮に寄進したことが伝わっています。

天明八年（一七八八）七歳の時、淡窓は父から『孝経』や『四書』の句読（漢文の文章の読み方）を受け、これが淡窓の読書の始まりとなりました。桃秋は、若い頃読書を好んでいたにも関わらず、家業の妨げになるとの理由から父久兵衛に叱られ、思うままに学問ができず、我が子である淡窓には学問を学ばせたいとの思いから、父自ら熱心に句読を授けたものと考えられます。

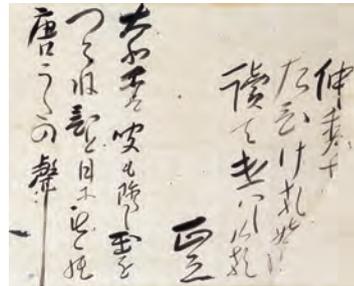
淡窓は幼児期に著名な俳人であった伯父秋風庵月化のもと育てられ、それ以降も廣瀨本家において父を始めとする廣瀨家の人々から教育を受けており、文学の香気が漂う廣瀨家において、淡窓は育まれていくことになります。

漢詩との出会い

天明九年（寛政元年＝一七八九）八歳の時、淡窓は父の紹介で長福寺住持の法幢上人と出会い、『詩経』（中国最古の詩集）の句読を受け始めます。これが正式に弟子入りをして学んだ最初でした。

寛政三年（一七九一）、一〇歳の春には、日田に来ていた久留米藩の松下西洋（筑陰）より本格的に漢詩を学び始めます。西洋は、久留米藩医の養子で藩校修道館では、文学の秀才といわれた人でした。一日に七言絶句一首を作るのが課業で、その後五言律詩や作文を学びました。一三歳の春に西洋が佐伯藩から藩校教授に招聘されて日田を去るまで西洋から熱心に漢詩を学び、この間には漢詩人としても有名であった広円寺の法蘭上人（銭塘）や長福寺の宝月上人らの集る詩会に西洋と共に出席したりしています。一二歳のとき、勤皇の志士・高山彦九郎が日田を訪問して、のち淡窓が一日に百首の漢詩を詠んだことを淡窓の父から聞き、「大和には聞くも珍らし珠をたらね一日に百の唐歌の声」という和歌を贈って賞賛しました。幼少時代の淡窓の詩風は、西洋が徂徠学系の学者であ

り、法蘭上人は徂徠学の僧大潮や服部南郭に学んだ詩僧であったので、古文辞学（徂徠学）系の詩風、つまりおおむね明の擬古派・前後七子（李夢陽・李攀竜・王世貞ら）の詩風で、その他の詩人にはまったく見向きもしなかったといえます。このことを「予、初て詩を学ぶ時、専ら銭塘・西洋二先生の指導を奉じたり。其の大略、（明の）七才子（荻生徂徠の）『絶句解』・（李攀竜の）『滄溟集』を以て祖とし、徂徠・南郭・万庵・大潮諸子を以て宗とす。・・・唐詩は唯だ（李攀竜の）『唐詩選』のみを讀みて、其の他は李（白）・杜（甫）・王（維）・孟（浩然）の集といへども曾て目に触るることなし。中（唐）・晚（唐）は勿論なり」と述べています。



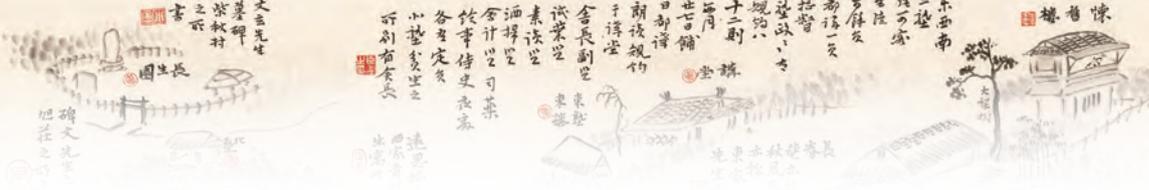
高山彦九郎和歌

その後、一六歳の正月、筑前福岡の亀井塾の門に入り、専ら亀井南冥から古文辞派（徂徠学派）の詩を学びますが、一方で、詩の多様さを知って、唐詩ばかりでなく宋詩の詩の味わいも愛するようになったといえます。このことを「其の後、北筑に遊んでは、専ら南冥先生の詩を学び、併せて同社の諸先輩の（詩）体



亀井南冥・昭陽肖像画





を模倣したり。龜門の(詩)体(徂徠・南郭らの)享保の諸家と大同小異なり。・・・十八歳の冬に至って、姪の浜に在りしに、書林、(清の乾隆帝撰の)『唐宋詩醇』を持ち来れり。(南冥の子の)大年是を求めたり。予、其の書を見るに、(盛唐の)李(白)・杜(甫)、(中唐の)韓(愈)・白(居易)、(宋の)蘇(軾)・陸(游)、六家の詩を選べるなり。予幼き時より、師説に因て宋詩を見ること魔道邪法の如し。是に至って唐・宋並べ称するを見て大いに怪み訝れり。時に南冥先生まさに『詩醇』を讀みたまへり。予、先生に問て曰はく、「『詩醇』は、李(白)・杜(甫)を除きて外に見るべき詩ありや」。先生の曰はく、「六家の詩、才力相ひ敵せり。但し白樂天、平弱に近し、五子に比すれば稍や劣れり。(蘇)東坡の詩、奇抜、韓(愈)詩に超えたり。但し、其の古詩好し、近体(詩)はあまり自由過ぎたり。王(世貞)・李(攀竜)諸子の非間を免れざる所なり」とぞ。予、是に於て、恍然として始て詩道の広大なること、明と盛唐との外に中(唐)晚(唐)あり、中(唐)晚(唐)の外に宋あり、皆捨つべきものに非ることを悟れり。其の時、蘇(軾)・陸(游)二家の詩を讀みて已に其の味ひを愛したり」と回想しています。

一八歳の一二月、淡窓は病氣によりやむなく龜井塾を退き郷里の日田に帰ります。この後は、療養生を送り、専ら独学で漢詩文を学んでいくこととなりますが、詩風が以前の詩とは一変したと

いいます。先に記述に続き「其の後、二十二歳の時に至り、予も又『詩醇』を得て之を熟読し、作る所の詩も又随つて一変せり」と述べています。これ以降は、淡窓の詩風は、学派などに捉われない淡窓独自の自由なものになっていったと考えられます。

淡窓の詩風

廣瀬淡窓は、晩年に近い天保八年(一八三七)五六歳の時に、それまで作った詩から撰んで詩集『遠思楼詩鈔・初編』二巻を上梓し、嘉永二年(一八四九)六八歳の時に『遠思楼詩鈔・二編』二巻を刊行しています。『遠思楼詩鈔・初編』は淡窓の著作の中で初めて出版された著作です。

①淡窓の詩風

江戸時代後期、淡窓の詩集『遠思楼詩鈔』は、当時の人々から菅茶山や頼山陽を遥かに凌ぐ高い評価を受けていたといえます。天保九年(一八三八)六月、大坂にいた淡窓の弟・旭

莊からの書簡で「遠思楼詩抄大いに世上に流行す。近年詩集の世に行なわるるもの、菅茶



『遠思楼詩鈔初編』

山に如くはなし、遠思楼は遠くその上に出でたり。山陽が詩集など行はると雖も、及ばざること遠し」との報告が残されています。淡窓の詩が好まれたのは、その温厚篤実な人柄が表れたような、「高古淡雅」「清淡閑雅」「清淡閑遠」などと称されるその詩風にあつたといえます。古風で格調高く淡々として上品な趣きで、しかも表現が簡潔で自然の情景と人情に富んでおり、その中にキラリと光る詩人のセンスの窺われる詩が多いと評されていますが、そういった詩の味わいは総じて日本人の氣質によく合うためであると思われれます。中国・清の儒者の愈樾は「平淡の中に、自ら精彩有り」と評しています。

②淡窓の詩作のあり方

淡窓の詩は、江戸時代のそれ以前の詩人の詩作のあり方とは違い、ある学派や結社の唱えるひとつの傾向に偏せず、その「中」を取るとする、淡窓独自の詩に対する考えのもとに作られています。その立場は『淡窓詩話』の中に「そもそも正徳享保の詩は、格調ありて性情なく、天明以降の詩は、性情を主として格調あることを知らず。是れ皆一偏にして中を得ざるものなり。予が好む所は、性情を主として格調を廃せず、二つのものの中を取るなり。享保は明を学び、天明は宋を学ぶ。予は唐人を主として宋明を兼用す」と述べられているところであり、また『夜雨寮筆記』で淡窓が「詩の要訣」であると教示した「詩に唐宋明清なく、

廣瀬淡窓



巧拙雅俗あり」という言葉に表れています。

中国の詩は、唐・宋・明・清といった時代により詩風の変遷があり、唐詩なかでも杜甫・李白といった大詩人の活躍した盛唐の詩を頂点としていますが、後世の詩人はその好みや考えによってその理想とする詩風を掲げて詩作し、それぞれの詩論を主張しました。その中国の詩人たちの説が、そのまま日本の詩人たちにも影響を与えます。大まかに見ると、中国では、盛唐詩の格調（格律声調）を重んじる明代の擬古派（李攀龍・王世貞など）や清の格調派（沈德潜）があり、一方それに反対し、宋詩風の詩の心情などの内容を重視する明代の公安派（袁宏道ら）や清の性霊派（袁枚）の流れがありました。江戸時代の日本の詩壇においては、正徳（一七一―一五）・享保（一七一六―三三）年間には、荻生徂徠の古文辞学派が、明の擬古派の影響を受けた格調説を主張し、主に盛唐詩と明詩を学び、門下に服部南郭・太宰春台・高野蘭亭・山県周南・僧大潮らが輩出して大いに流行しましたが、天明（一七八―一八八）・寛政（一七八九―一八〇〇）以降、徂徠系の古文辞派に反対して、折衷派の山本北山などが、自己の性情を重んじる性霊説を主張して宋詩風の詩を学び、僧六如・菅茶山・市河寛斎・頼山陽・篠崎小竹・田能村竹田らの多くの共鳴する詩人が出ています。こういった当時の詩壇の傾向に淡窓はこだわらず、どちらにも偏らずに「性情を主として、格調を廃せず、

二つのものの中を取る」としています。

その理由については、『淡窓詩話』で「正享の際、明体を学ぶ者の詩は生に過ぎ、今の宋体を学ぶ者は熟に過ぎたり」明体を学ぶ者、好んで金玉・龍鳳・彩雲・綺樹などの字面を用い、之を壮麗と思へり。仏壇の飾りの如くにして極めて人を俗殺す。予深く此の類を憎む。・・・今人の（宋体を学ぶ者の）詩、務めて風流の態を写す。繪巾を戴き竹杖を曳き香を焚き茶を煎じ、世事を忘却して悠然自得することなど、詩として之なきはなし。果たして其の通りの境界にして心も其の処に安ずることならば、左様に数々言ふには及ぶまじ。是れ全く假高士・偽雅人と謂ふべし。・・・然らば、今の繪巾・竹杖は、真に俗物の語と謂ふべきなり」として説明するように、正徳・享保のころの古文辞派（徂徠派）の明詩風を学ぶ者の詩は、形式的な体裁や言語上の音調を模倣し、宮廷・官僚風な壮麗な語句をならべたてるなど生硬に過ぎ、逆に、天明以降に盛んとなった宋詩風を学ぶ者の詩は、自然な心情を尊ぶあまり、風流な趣の表現にもっぱら技巧を凝らすなど、頹廢的で爛熟に過ぎるといっています。要するに、どちらの詩作の姿勢も、行き過ぎれば俗な



『淡窓詩話』

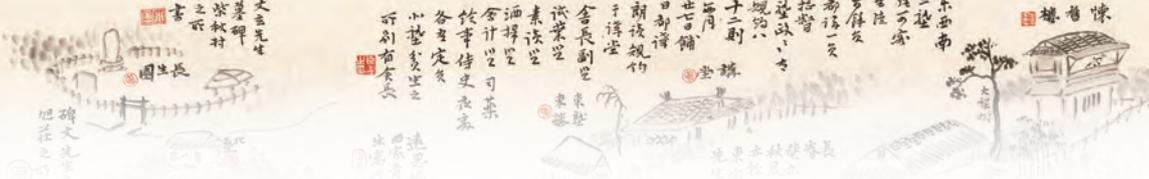
詩となってしまうといい、ともに詩の道を踏み誤った偏った態度とされています。淡窓は、一つの時代・一人の詩人・一つの流派だけに偏ることを、人の性格が偏ってはいけないように、中正を得ないものとして避けたのです。

淡窓の詩論

淡窓が折に触れ、門人の質問に答えるなどして詩について語っているものを、集めて編集したものが『淡窓詩話』です。淡窓没後の明治一六年（一八八三）、広瀬青邨によって出版されています。詩の意義、詩の学び方、詩作の態度、古今の詩人の評価などが率直に語られたもので、詩についての淡窓の考えがよくうかがえるものです。

① 詩を学ぶ意義

詩を学ぶ意義・効用について、人に対して自分の技法の機能を説きたてることは卑しむべきであつて「（詩を好むのは）吾が性の好む所なり。・・・唯自己の娯みの為と称すべし」と前置きして、あえて論じれば、中国のように詩が科擧（官吏登用試験）の試験科目となつて国の政事に関係するようないことはないので、我国ではまったく学ぶ者の慰みものには過ぎないのであるが、詩を学ぶだけの益として「詩を作る人と詩を好まざる人と、異なる所を見るべし。詩を作る人は温潤なり。詩を好まざる人は刻薄なり。詩を作るものは



通達なり。詩を作らざるものは偏僻なり。詩を作るものは文雅なり。詩を作らざるものは野鄙なり。其の故何ぞや。詩は情より出るものなり。詩を好まざるは、其の人天性情なきが故なり」といつています。そして、「情」の説明として「凡そ人の心中を二つに分くれば、意と情なり。意は是非利害を判断して、有益の事は之を為し無益の事は為さず、是れ意の職なり。無益と云ふことは知りても、忍び難く棄て難き所、是れ情なり」とします。そこで、無益とは知っていても、人の死を歎き、憂いを口に出し楽しみを口に出すのが人情であって「人にして情なきは木石に同じ。詩文の道、文は意を述ぶることを主り、詩は情を述ぶることを主る。故に、無情の人は必ず詩を作ること能はず、作りても詩にならず。かくの如きの人は、方正端厳の君子なりと雖も、其の行事必ず人情を尽さざる所あり」といつています。結論として「孔子曰く、溫柔敦厚（性格が素直で人情に厚い）は詩の教へなりと。此の四字、唯だ一つの情の字を形容するのみ。是れ、予が弟子をして詩を学ばしむる所以なり」と述べています。詩を作れば人間としての「情」が養われ、それが温厚な人格の形成に資することとなるので、自分は門人に詩を学ばせるのだと述べています。

② 淡窓の好む詩人

淡窓は、自分の詩でも自然の景を好んで詠んでいます。中国の自然派詩人といわれる陶淵明・

王維・孟浩然・韋応物・柳宗元の「五家」をとくに好んだといっています。ただ「陶・王・孟・韋・柳の五家、予、其の詩を愛して之を諷詠すること頗る熟せり。然れども、其の詩を師法として之を学ぶには非ず。凡そ古今の人相及ばず、且つ人々の天分あり、強て古人を模倣することあるべからず。若し我が門に在る者、是れ等の詩を模倣して、是れ我が師の流派なりと云はば、大に予が本意に背くことなり。先ず此の意を熟知すべし」また、「嘗て陶を以て祖とし、王・孟・韋・柳を宗とし、一祖四宗の言あり。是れ其の流派の伝来する所を品評するものにして、我が詩の祖宗とするには非ず。聞く者誤り認むべからず」と述べ、五人の詩人を好むけれども、その流派を主張したものではないことを強調しています。

③ 詩を学ぶ態度

詩の本質は、「詩に唐宋明清なく、（ただ）巧拙雅俗あり」と断言するように、詩の理論や学派によつて論じられているような、唐・明の詩がよいとか、逆に宋・清の詩がよいとかがあるのではなく、詩にはそれぞれの詩の構成や趣きなど内容の違い、つまり巧妙か拙劣かの違い、それに高雅か低俗かの違いがあるだけだと、淡窓はいつています。そこで「(唐宋明清の) 四代の詩、同じからずと雖も各其の佳境あり。何れにても己が好む処に従いて可なり」とし、また「一代の中にて、一人を限りて之を学ぶ、甚だ愚かなることなり。是

は皆な初め唱へし人の真似をするなり。詩は心を写すものなれば、必ず不同あるべきなり。然るに此の如く一樣になること、其の人の天然にはあらず。強いて世俗の流行する処に合はするものなり。故に、多く古集を読み、而る後、己が性の好む処と才の近き処とを択んで之を学ぶに如くはなし」と述べ、人の性格が異なる如く、その人の好みや才能に応じて、どの詩風に倣つて詩作してもよいと語っています。

そして、その詩作の秘訣については、「巧拙は用意の精粗に因り、雅俗は著眼の高卑にあり」とします。つまり、「拙を去て巧に就かんと思はば、意を用ることを精しくすべし。其の拙なるは意を用ること粗なればなり」として、詩心を働かせることを精緻にするべきといます。また「俗を去て雅に就かんと思はば、眼を著ることを高くすべし。其の俗なるは眼を著ること卑ければなり」として、詩のねらいを高遠な詩趣におくべきであるとします。そして、そのためには、「意の用い方を精しくすること、推敲鍛錬に在り」とし、また「眼を著ることを高ふせんとならば、古詩を熟読して之を品目するに如くはなし」と説きます。つまり詩作の秘訣は、詩の推敲鍛錬（辞句を鍛え練ること）と、古人の名詩の味わいの熟読とその批評眼の養成にあると述べています。

廣瀬法意

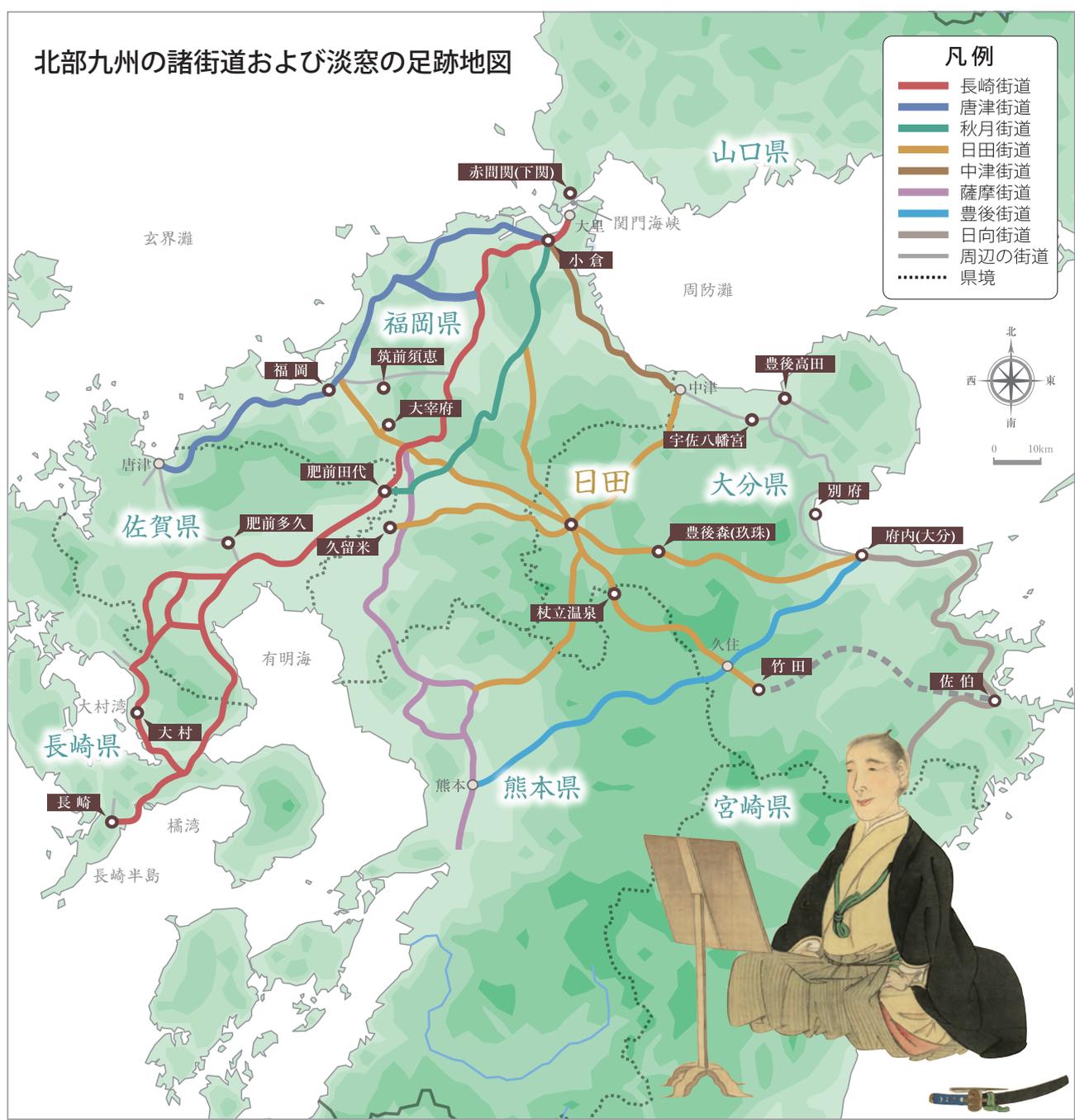


廣瀬淡窓の足跡と詩作

病弱であった淡窓は生涯に数えるほどしか旅に出していません。本州へは下関に行つたのみで、旅先は北部九州に限られていました。ここでは淡窓が訪れた地と漢詩を詠んだその足跡を紹介します。



咸宜園現況 (左：遠思楼、右：秋風庵)





咸宜園
壬午十一月

筑前行 (福岡県) (旧筑前国)

- ① (寛政8年 (1796) 8月15歳)
豆田-林田-秋月-太宰府-博多-福岡
- ② (寛政8年 (1796) 冬15歳)
豆田-三叉管公の祠-久喜宮-甘木-太宰府-博多-福岡-唐人町
- ③ (寛政9年 (1797) 1月16歳)
豆田-林田-秋月-福岡 (亀井塾入塾)
- ④ (享和2年 (1802) 8月21歳)
豆田-甘木-秋月-福岡-西新 (亀井塾)
- ⑤ (文化6年 (1809) 28歳)
豆田-筑後古川-大宰府-福岡-博多-箱崎-須恵
- ⑥ (文化11年 (1814) 3月33歳亀井南冥弔問)
豆田-甘木-雑所隈-亀井塾-浄満寺 (南冥墓) -博多-永壽院-大宰府-甘木-恵蘇宿-筑後吉井-東光寺-袋野-長溪-豆田
- ⑦ (天保13年 (1842) 3月61歳 亀井昭陽七回忌)
咸宜園-隈川-久喜宮-志波-比良松-横大道-甘木-石櫃-雑餉隈-博多-聖福寺-福岡-浄満寺-櫛田宮-住吉川-春好-住吉宮-大休岡-承天寺-入定寺-中島 (中洲) -聖福寺-崇福寺-箱崎八幡宮-堅糟-東長寺-博多-大宰府-執行坊-天満宮-勾當坊-甘木-久喜宮-長念寺-関村-咸宜園

肥前田代行 (佐賀県)

- ① 田代行 (文政12年 (1829) 5月~6月48歳)
咸宜園-久喜宮-会所宿-比良松-甘木-大宰府-大宰府天満宮-木山口-田代-東明館-田代-筑後路-宮野路-府中-高良山-玉垂宮-明乘院-府中-田主丸-吉井 (東光寺)-千束町-長溪-石井-護願寺-家
- ② 田代行 (安政元年 (1854) 1月73歳)
家-瀬戸口-鷗羽驛-甘木-寄井野町-松崎驛-田代-明府及高橋館-田代-甘木-鷗羽驛-久喜宮-関村-祝原-萩尾坂-家

筑後・肥前行 (福岡県・佐賀県・長崎県) (旧筑後国・旧肥前)

- ① (天保13年 (1842) 9月~12月61歳)
日田-千束町-吉井-東光寺-吉木-追分-府中-久留米五穀神社-瀬下-水天宮-豆津-神崎驛-境原驛-佐賀-牛津驛-北方驛-武雄驛-嬉野驛-田原坂-大村-彼杵-大村-松原-大村城下-大村城-學館 (五教館) -客館 (寺の別院、公的客館) -華林軒-五教館-大村-港口-伊喜力-洗切-長崎-諏訪神社-大村邸-大音寺-崇福寺 (唐寺) -大徳寺-雄浦-大村邸-學館-大村邸-大鳩-長崎-松森天満宮-洗切-伊喜力-學館-寶園寺-華林軒-大村-彼杵-大楠-嬉野-武雄-北方驛-馬鬚嶺-多久-牛津-佐賀-境原-府中-高良山-田主丸-吉井-千束-隈上-長溪-入江の浮橋-黒男祠-家
- ② (天保16年=弘化2年 (1845) 2月~4月64歳)
家-入江-保木-熊上-千束町-吉井-東光寺-吉井-追分驛-久留米-水天宮-神崎驛-佐賀-小田驛-武雄-大村-彼杵-旧館-彼杵-松原の館-放虎原-大村城下-鱗苔室-千年瀧の別館 (千年館) -五教館-千綿 (千綿溪) -鱗苔館-場戸-乗船-伊喜力-洗切-長崎-大浦-大村邸-新大工町-唐蘭館-大村邸-長崎-洗切-伊喜力-城脚-鱗苔室-千年館-五教館-大村-彼杵-旧館-彼杵-大楠-嬉野-武雄-本部-大川野-唐津領-徳末 (須恵) -濱崎-深江-前原-今宿-姪ノ濱-福岡-博多-大宰府-執行坊-甘木-久喜宮-杷木-萩尾坂-續-友田-家

凡例：地名に関しては基本的には淡窓の記述のままである。しかし一部、現代の呼称にしたものも含まれる。また旅からの帰宅先については記述がないものが多いため、推定で補った。
出典：『淡窓全集』所収の「淡窓日記」および「懐旧楼筆記」より作成

下関行 (山口県) (旧長門国)

- 天保12年 (1841) 8月~9月60歳
東家-豆田町-山田原-大行寺 (東峰村) -宝珠山村-小石原柴峠 (芝峠) -添田驛-香春驛-採銅所-呼野-徳力驛-小倉-大橋-小倉城下-大里-下関-龜山八幡宮-阿弥陀寺-桐山ヶ楼-梅坊 (阿弥陀寺別院) -迫門-観音菴-筋ガ濱-金比羅の祠-赤間関-梅坊-大里-小倉-盲人谷-香春-柴峠-小石原-三郎丸-河原街-家

豊前行 (福岡県) (旧豊前国)

- 豊前行③ (文化7年 (1810) 9月29歳)
豆田-岳滅鬼-英彦山-権現祠-上宮-豊前坊 (高住神社) -下山

豊前行 (大分県) (旧豊前国)

- ① (寛政6年 (1794) 8月13歳)
豆田-小クボノ里-山口村-猿渡-四日市-宇佐八幡宮
- ② (文化2年 (1805) 冬24歳)
豆田-戸畑村-猿渡-四日市-宇佐神社-驛宮川-長須賀-四日市-島村-火桶山-豆田
- ④ (文政12年 (1815) 4月48歳)
豆田 (魚町) -宮園-【柿坂】 樋田 (青の洞門) -福島-大貞八幡宮 (鷹神社) -四日市-辛島 (泉神社) -宇佐神宮 時枝善光寺-高江村-新田-住江-奈良湯-浮殿-辛島-呉崎 (新田見物) -高田-水崎-泉元得-呉崎-猫石-住江 奈良湯-辛島-四日市-阿倉が池-麻生谷-山口 (三光村) -羅漢寺-宮里-宮園-中摩-石坂-財津-菅相寺-豆田

豊後行 (大分県) (旧豊後国)

- 珍珠行① (天明6年 (1786) 5歳)
秋風庵-月出山・龍門の瀑布・雁扇の玉
- 佐伯行 (寛政7年 (1795) 14歳)
豆田-五馬市-出口村-宮の原-黒川の手前-久住原-竹田 (岡) 城-中の谷-佐伯城下-竹田-久住-宮の原-豆田
- 珍珠行② (天保11年 (1840) 59歳)
家-馬原-大石嶺-薬研坂-平川-魚返ノ瀧-石田河原-龍門寺の瀑布-森城下-三島宮 (末廣神社) -平川-大太郎坂-梨帽山-家
- 府内行① (弘化元年 (1844) 9月~10月63歳)
家-中城-堤の西 (花月川左側) 平川-合屋-船來-初塞-今宿-並柳 (由布市川上) -片山-鳥井-堀田-別府-西法寺-街上-海辺-府内城下の津口-府内城-府内城下-松榮山-春日祠-光西寺-善行寺-由原八幡宮-生石-駄原-濱市-由原-一阪-府内-賀来-一ノ僧庵-朴木 (由布市狭間町) -石松村-船來-平川-合屋-大太郎-家
- 府内行② (天保16年 (弘化2年) 5月~6月 (1845) 64歳)
家-中城-戸畑-森城下-截塞-今宿-並柳-朴木-赤野 (臼杵) -府内城下-府内城-學館 (采芹堂) -府内-朴木-並柳-截塞-森城下-合屋-大清水-家

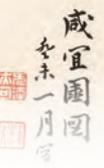
杖立温泉行 (熊本県) (旧肥後国)

- 杖立温泉行 (天保14年 (1843) 8月62歳)
日田-四辻-上堰-女畑-五馬市-出口-杖立道-杖立-出口-女畑-龍馬森 (放生会の祭) -家

※紙面の都合上、会った人物や交通手段に関しては省略した。

廣瀬流意





豊前行 英彦山に詣でる

「彦山」二九歳

彦山高處望み嵐臺木末樓臺
晴姓分日昏天煙人多夢互相
教化教名奪や 廣瀬建

彦山 高處 望み嵐臺
木末 樓臺 晴れて始めて分る
日暮 天壇 人去り尽くし
香煙散じて 数峯の雲となる



英彦山神宮奉幣殿 (福岡県添田町)



英彦山参拝時に訪れた高住神社

桂林園で詠む

「桂林荘雜詠 諸生に示す」第二首 三四歳頃

休區他作多しを辛回礼を交自
相親紫衣履上を衣以て天風
川派我拾芳 桂林荘雜詠 建

道うを休めよ 他郷 苦辛多しと
同袍 友有り 自ら相い親しむ
柴扉 暁に出づれば 霜 雪の如し
君は川流を汲め 我は薪を拾わん



桂林荘公園

日田を遊山

「隈川雜詠」第五首 淡窓三〇歳頃

龍舟同上晚空陽鳥古鐘響出岸
散舟陸岸舟人未渡暮白浪塔
江花 隈川雜詠 淡窓

観音閣上 晚雲帰り
忽ち 鐘声の翠微を出づる有り
沙際 舟を争いて 人未だ渡らず
双々たる白鷺 江に映じて飛ぶ



三隈川

豊前行道中山国谷を見直す

「耶馬溪」四八歳

青帘往々 壺新種杜宇花紅夏之四一
里性陳阿轉十三郎德昔山年尾峰枝
北米竹尚茂樹厚葎種似昔峰日旅定
晴昔夢 劍門同二葉 藤末 淡窓

青帘往々にして新醪を売り
杜宇花紅にして夏已に回る
一百里 唯だ溪に随つて転じ
十三村 聰て山を背にして開く
奇峯は地に投じて筍より尖り
瘦樹は巖に纏いて短苔に似たり
怪しむを得たり旅窓疇昔の夢
劍門関下 驢に乗りて来たる

咸宜園で詠む

招隠洞 五五歳頃

孤蒲 小橋に映り
宛も陂塘の趣き有り
翠禽 魚を得ず
猶お垂楊樹に立つ

「心遠處」

新秀 数竿の竹
偶たま窓戸の間に当る
幽人 心おのずから遠く
必ずしも南山を見ず

「醒齋」

夢の裏 吾が友に逢ひ
相携へて 花下に迷ふ
醒めて 弧蝶を見る
飛びて 小欄の西に在り



夜雨寮



心遠處

筑前行 淡窓六一歳

「御風楼主人、予を那珂川の上りに
おいて觴す、賦して贈る」

住吉祠前 芳草の初
沙辺に手を携えて歩徐々
帰り来たりて郷人に向いて詫らんと欲す
楊柳の陰中 麵魚を煮るを

春好



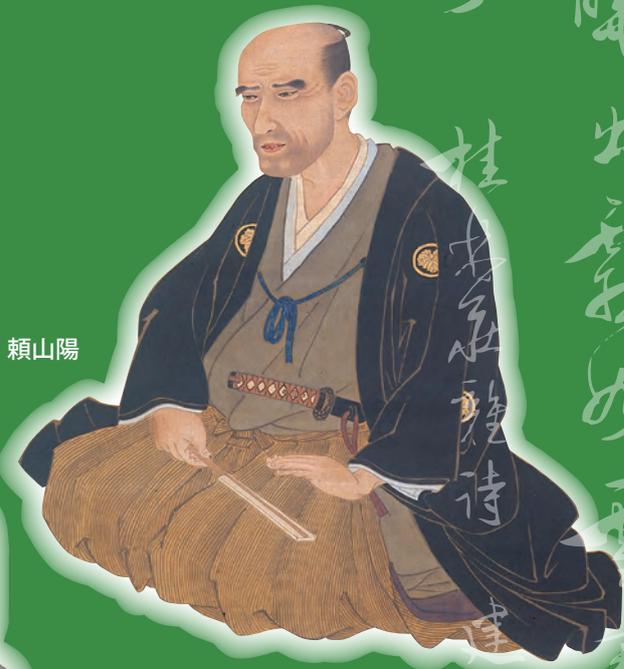
住吉神社 (福岡市博多区住吉)

吏隠 聚まりて村を成し
蕭然たり春好き処
琉離花を護らず
野蝶来たりて還た去る

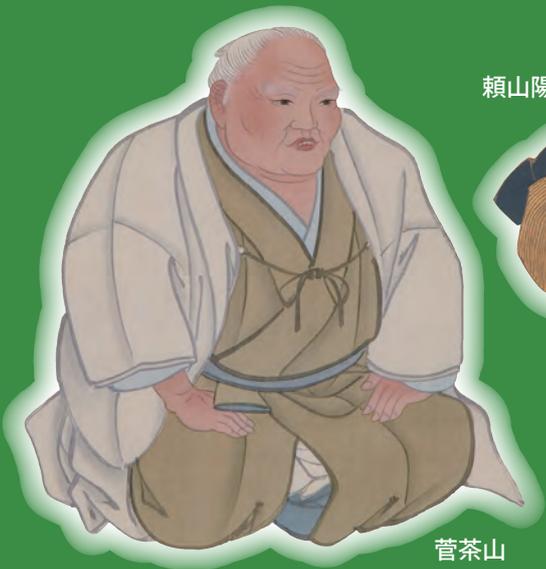


春吉 (福岡市中央区)

休道他邦多苦辛 同胞多友自
相親 柴庵曉 出心如水雪 震及
川流我拾薪



頼山陽



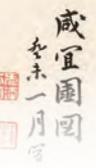
菅茶山

生来、病弱であった廣瀬淡窓は江戸や京摂への遠遊はかなわぬものでした。そのため七五年の生涯における行動範囲は、北部九州に限られていました。

しかし廣瀬淡窓の名が儒学者・教育者・漢詩人として世間に知れ渡るにつれて、九州に遊歴する文人たちは日田の淡窓のもとを訪ねて来るようになりました。

ここでは淡窓と文通による親交のあった菅茶山と文政元年に日田を訪れ、淡窓と面会した頼山陽を中心に交流のあった文人について見ていきます。

第二章 文人との交流



淡窓の交流関係

淡窓は生来病弱であったため、江戸や京摂など遠方への遊学はかなわず、淡窓の行動範囲は自ずから狭いものとなりました。東は府内（大分市）、西は長崎（長崎市）、南は佐伯（佐伯市）、そして北限は本州である赤間関（下関市）でした。

淡窓の交流関係は北部九州が中心でしたが、大坂の篠崎小竹や備後の菅茶山、日田生まれの幕臣川路聖謨など、文通による親交がありました。また日田は豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後のいずれにもつながる交通の要所であり、絶えず人や物が交流する場所でもありました。そのため日田・隈町の豪商らの潤沢な財力を背景に多くの文人墨客が日田を訪れていました。そして淡窓の名が儒学者・教育者・漢詩人として世間に知れ渡って行くにつれて、遠方より淡窓を訪ねてくる人々が多くなり、淡窓は日田に居ながらにして全国の著名な文人たちと交流することができました。

淡窓は実際に交流のあった人々や著名な人物を淡窓の著作資料『淡窓日記』や回顧録『懐旧楼筆記』、また見聞きした人物に対する評価を書き記した『儒林評』に遺しています。これらの資料を参考に交流した文人の中から菅茶山、頼山陽を中心に見て行きます。

菅茶山とは

菅茶山は、江戸時代後期の儒学者・教育者・漢詩人です。寛延元年（一七四八）、山陽道の宿場町、備後国安那郡川北村（現広島県福山市神辺町）で酒造業と農業を営んでいた菅波久助（扶好）と半の長男として生まれました。幼名は喜太郎、次いで百助、長じて晋帥と名乗り、字は礼卿、太仲、茶山と号しました。

茶山の父扶好は神辺駅の本陣を務めており、俳諧を趣味とし、母の半もとても教養のある人物でした。また伯父の高橋慎庵は医者を務め、漢詩・和歌・狂歌を嗜んでいました。茶山はこのような教育的環境の中で成長していきました。

明和三年（一七七六）、幼いころより学問を好んでいた茶山は、一九歳で京都へ遊学し、市川某について古文辞学を学び、のち那波魯堂に朱子学を、和田東郭に古医方を学びました。

天明元年（一七八一）頃、私塾「黄葉夕陽村舎」を神辺に開き、教育者としての道を歩み始めます。



郷校・私塾「廉塾」（黄葉夕陽村舎）
広島県福山市（国特別史跡）

寛政八年（一七九六）、茶山は「郷塾取立に関する書簡」を福山藩に提出し、塾と田畑を献上して、黄葉夕陽村舎を郷校とするように願い出でて認められました。それ以降、塾は「廉塾」「神辺学問所」と呼ばれるようになりました。

茶山は福山藩主阿部正清に厚遇され、享和元年（一八〇一）に福山藩の儒官を命ぜられ、文化六年（一八〇九）には正清の命によって『福山志料』を編纂しました。

一方、茶山は漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』を文化九年（一八一二）より刊行し、江戸時代後期を代表する詩人として、大変評価されていました。

こうして菅茶山は儒学者・教育者・漢詩人として全国に名を馳せて、神辺の茶山の元を多くの文人墨客らが訪れることになりました。



「菅茶山肖像画」高橋波藍写・岡本花亭賛（複製）原資料は個人蔵
広島県立歴史博物館寄託



淡窓と茶山の関わり

茶山と淡窓は三四歳年の差があり、淡窓が茶山のことを知ったのは一五歳の頃であったと『儒林評』に記しています。この時、茶山は四九歳で、私塾「黄葉夕陽村舎」を郷校とするように願い出でた年でした。その茶山のことを『儒林評』に詳しく書いています。

一五歳の頃に初めて、茶山の名前とその詩「愛看大月抱松升」を知りました。その頃の淡窓は宋体の詩を好んでいたため、あまり茶山を評価しなかつたとあります。その後、淡窓が福岡の亀井南冥・昭陽父子の亀井塾で学んでいる間、南冥の弟曇栄禅師から茶山は「詩の名家」であると聞き、茶山への評価を改めました。そして、淡窓が二十七歳の時に自ら作った漢詩数一〇首を蓑浦東伯（佐谷龍山）を介して茶山に詩稿の批評を請い、淡窓の親族である館林清記（万里）が淡窓の漢詩を持参して、茶山の元を訪ねました。二人は生涯一度も直接会う事はありませんでしたが、これ以後、淡窓と茶山の文通による交流が二〇年ほど続きました。

文政九年（一八二六）、大病から回復した淡窓は、書齋を建てることになりました。これより以前、号を淡窓と名乗り始めた頃、淡窓は茶山に「淡窓」の二字を依頼して書いてもらっていました。淡窓はこの新築の書齋に茶山に書いてもらった書

を掲げて、建物の名を「淡窓」としました。

また文政一〇年（一八二七）五月、淡窓四六歳、茶山八〇歳の時、淡窓の末弟である廣瀬旭荘が茶山の元を訪ねています。この時、茶山は病に伏せていましたが、旭荘の来訪を茶山は大変喜び、その滞在は約三カ月にも及びました。八月、旭荘が去る際には、茶山は涙を流して別れを惜しみ、淡窓宛への七言絶句二首「題廣瀬子基詩巻後」と自分の死期に近いことを悟っていた茶山は遺品として、硯を一面旭荘に託しました。それから数日後の八月一三日、菅茶山は八〇歳の生涯に幕を閉じました。

淡窓と茶山は同じ庶民出身で、儒学者・教育者・漢詩人と、共通点の多い二人でした。淡窓は、この偉大な先達から、二〇数年に渡る文通によって多くのことを学んだにちがいありません。

咸宜園蔵書に見る茶山の著作

公益財団法人廣瀬資料館には廣瀬本家や咸宜園の蔵書であった江戸時代の和本が多数保管されています。その中には茶山の漢詩集で文化九年（一八二二）に刊行された『黄葉夕陽村舎詩』前編と文政六年（一八二六）に刊行された『黄葉夕陽村舎詩』後編があります。

この茶山の詩集の前編には「日益月加無尽蔵」、「宜園蔵書」の蔵書印が押されており、咸宜園の



『黄葉夕陽村舎詩』



『黄葉夕陽村舎詩後編』

蔵書であったことがわかります。後編には「日益月加無尽蔵」の蔵書印に加えて、「宜園之蔵書」、「同社之外雖親戚故人不許借此」の印が押され、前編・後編ともに咸宜園の蔵書として、多くの門下生の利用に供されていたものと思われる。

これらの刊本の他に『黄葉夕陽村舎詩』前編の中から漢詩を選び、淡窓自身が書き写したものとされる写本が存在しています。この本には咸宜園の蔵書印である「日益月加無尽蔵」、「宜園蔵書」の他、巻末に淡窓の印である「廣瀬建印」、「子基」が押されており、淡窓の個人的なものであった可能性がります。この写本は廣瀬家を訪れた徳富蘇峰によって、「菅茶山詩鈔」の名前が与えられ、廣瀬資料館において保管されています。

廣瀬法意

頼山陽とは

頼山陽は江戸後期の儒学者・漢詩人です。安永九年（一七八〇）、広島藩儒であった頼春水と静子の長男として大坂江戸堀に生まれました。名は襄、通称は久太郎、徳太郎、字は子成、号は山陽が最も著名ですが、三十六峰外とも号しました。

山陽の父である春水は、安芸国賀茂郡竹原下市で紺屋を営む頼惟清と仲子の長男として生まれ、幼少の頃より学問を修めていました。その後大坂に遊学し、片山北海を盟主とする詩社「混沌社」に入り、のちに「寛政の三博士」といわれた柴野栗山・古賀精里・尾藤二洲らと交流を持ちました。やがて春水は、安永二年（一七七三）、二八歳の時に大坂江戸堀に「青山社」を開塾し、大坂で山陽が生まれることとなります。天明元年（二七八一）、父・春水は広島藩学問所創設にあたり、藩儒として登用され、後に山陽は広島へ移りました。



「頼山陽肖像画」帆足杏雨画
廣瀬旭莊賛
京都大学総合博物館蔵

山陽の叔父である頼春風や頼杏坪もそれぞれ学問を修め、春風は竹原で家を継ぎ、医者を開業する中、郷学「竹原書院」を開くなど学問振興に尽力しました。杏坪は、兄・春水



頼山陽居室
広島県広島市（国史跡）

や江戸の服部栗齋、備中鴨方の西山拙斎にも学び、天明五年（一七八五）には広島藩儒となり、広島藩子弟の教育に当たりました。また頼兄弟・山陽は備後の菅茶山と親しく交流しており、茶山の詩集である『黄葉夕陽村舎詩』には頼家の人々を詠んだ詩が多く残っています。山陽はこのような学問一家の中で成長していき、始めは叔父である杏坪について学びました。寛政九年（一七九七）、一八歳の時に江戸へ出て、

昌平坂学問所（昌平黌）の尾藤二洲に学び翌年帰郷しました。寛政一二年（一八〇〇）、山陽が二一歳の時、京撰への遊学の気持ちが強くなり、藩の許可を得ずに京へ向かいますが、

山陽は広島に連れ戻され、脱藩の罪により頼家の座敷牢に幽閉・廃嫡されました。しかしこのことが思いのままに読書し、執筆活動に励む機会となり、『日本外史』（源平から徳川氏に至る武家の興亡を記した歴史書）、『新策』の初稿が成りました。文化二年（一八〇五）、二六歳の山陽は幽閉が解かれ、同六年一二月、山陽三〇歳の時、頼家と親しく交流していた備後の菅茶山より、廉塾の講師として迎えられます。茶山は山陽を姪と結婚させ、養子にして福山藩に出仕させようとはしますが、山陽は遊学への思いが強く、それを断り、一年ほど廉塾に滞在した後の文化八年（一八一二）閏二月に上坂、やがて上京し、以後、生涯を京都で送りました。

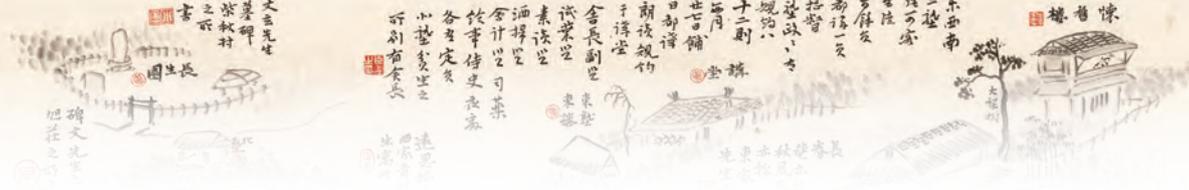
山陽は京都で塾を開き、多くの弟子を育てながら、自身の著作の推敲や詩作に専念しました。また文化一二年（一八一五）、小石元瑞の養女梨影と結婚し、支峰（二男）・三樹三郎（三男）が生



『新策』



『日本外史』



まれています。文政九年（一八二六）には『日本外史』二二巻を完成させ、松平定信に献上し、天保元年（一八三〇）には『日本楽府』一巻を刊行しました。

文政五年（一八二二）、山陽は京都鴨川の西岸にある三本木に「水西荘」に定住し、同六年には「水西荘」の庭内に山紫水明処を建てています。

山陽は天保三年（一八三二）、咯血し、自身の著作である『通議』、『日本政記』の完成をまたず、五三歳の生涯に幕を閉じました。



頼山陽書齋（山紫水明処）
京都府京都市（国史跡）

淡窓と山陽の関わり

淡窓が山陽のことを知ったのは、淡窓の著した『懐旧樓筆記』や『儒林評』によると、淡窓が初めて菅茶山に、自身の漢詩文の詩稿を門下生の館林万里（清記）に依頼して送った文化五年（二八〇八）の二七歳の頃であると記しています。しかし、山陽が廉塾に招かれたのは文化六年一二

月のことであるので、清記が山陽に淡窓の漢詩文を見せたのは文化六年末〜同年七年頃と考えられます。この時清記は、備後に茶山の塾にしばらく留まり、山陽にも淡窓の漢詩文の評を請うたといわれています。これ以後、茶山・山陽との交流が始まりました。

文化一三年（一八一六）二月に山陽の父、頼春水が広島で没し、文政元年（一八一八）二月、父の三回忌法要のために京都から広島へ帰っていた山陽は、その足で九州各地へ旅に出かけます。一月三日に日田を訪れた山陽は、隈町の豪商鍋屋の森五石宅に宿泊し、八日に秋風庵を訪ね、淡窓と面会しました。

秋風庵において、山陽と対面した淡窓は「私これまで会った人の中で、この人より才能がある者はいなかった」と評しています。ただ山陽の人となりについて、「簡傲にして礼なく、惜しいかな」と述べており、他人より勝る才能を持つが故に多少、まわりを見下すところがある



『耶馬溪図巻』個人蔵

ったように映ったようです。

淡窓との面会を終えた山陽は、久留米などを訪れたのち再び日田に戻り、一月五日には日田を発ち中津の山国谷を訪れました。そこで山国の山水に感嘆した山陽は「耶馬溪」と名付け、海内第一、天下の絶勝と評して、耶馬溪の風景をスケッチしたり、漢詩を作成するなどして、一年近くに渡った九州遊歴を終え、九州をあとにしました。この後山陽の「耶馬溪図」により、多くの人が耶馬溪の山水の美しさを知ることとなりました。

日田に伝わる山陽のエピソード

淡窓と山陽の面会した折のエピソードが日田にいくつかが伝わっています。九州各地を遊歴していた山陽が



平野五岳肖像画

日田にも訪れることを知った淡窓は、山陽と面会した際にすぐに漢詩の応酬ができるように、門下であった平野五岳に山陽の立ち寄った先での出来事を調べさせて、報告させたといわれています。淡窓はそれを元に漢詩を作り、山陽が日田を訪れるのを待ち構えていました。山陽が淡窓を訪ねて

廣瀬法意



来ると、淡窓は九州遊歴中の話を山陽に尋ね、山陽が話す言葉を受けて、即席で漢詩を作った様子をみせました。これに驚いた山陽は、淡窓に和韻（他人の漢詩に和して、同一の韻を用いて詩を作ること）しようとして、慌てて雪隠（便所）に駆け込んだところ、懐の韻礎（韻字を分類した辞書）を雪隠に落としてしまい拾うに拾えなくなってしまうました。後日、山陽より淡窓に手紙が届き、雪隠の韻礎を拾い上げたならば返却してもらえないだろうかと書いてありました。

このエピソードは大阪朝日新聞に連載された『龜門の二廣』（明治四一年（一九〇八）一月七日）に拠るもので、山陽を迎えるに当たり、その詩才に負けまいと淡窓の意地が出たエピソードとしては面白いものですが、口碑で伝わるもので事実かどうかはわかりません。淡窓が即席で作ったかのように見せかけた漢詩に非常に驚いた山陽が雪隠に韻礎を落とすなど、多少山陽を茶化していることから、附会（こじつけ）ではないかとも言われています。山陽が福岡で訪ねた亀井昭陽の門下の元にも同じように雪隠で韻礎を落とした話が伝わることから、山陽の才能を妬んだ人々の間に伝わっていたものだと思われませんが、もしかしら山陽は雪隠で詩作する癖があったのかもしれませんが。

もう一つのエピソードに淡窓門下随一の天才と言われた佐伯藩出身の中島子玉に関わるものがある



中島子玉肖像画

昭陽にも学び、宜園第一流の才子といわれました。山陽が咸宜園を訪れた時、子玉は一八才でその場にいました。しかし山陽はただの若造と思い、見くびって一言も声をかけませんでした。ところが淡窓が子玉に命じてその漢詩を山陽に見せたところ、その才能に驚いた山陽は、態度を改めて子玉に対して謝罪しました。後に京都に帰った山陽は、九州遊歴における収穫として、山水の風景として耶馬溪（山国谷）を見たことと中島子玉という人材を発見したことだと語ったといわれています。

ります。咸宜園には優秀な門下生を表す言葉に「五子十八才子」があり、子玉はその五子の一人にあげられる人物で亀井

交流のあった文人たち

淡窓には、菅茶山や頼山陽以外にも江戸時代後期の著名な文人墨客との交流がありました。

文政七年（一八二四）九月には美濃国の出身の漢詩人梁川星巖とその妻・紅蘭が日田を訪れ、咸宜園の淡窓の元にも訪れたことが淡窓の日記に記されています。後に梁川星巖は、漢詩の選集である『天保三十六家絶句』を編集した際、淡窓の漢詩文を選び収録して出版しています。翌年の文政八年（一八二五）には、同じ豊後国の画家田能村竹田が日田を訪れます。竹田の嗣子である太一（後の田能村直入）が咸宜園に入門したため、度々淡窓の元を来訪しました。天保一三年（一八四二）九月には大村純顕の招聘に応じて、大村に向かう途中に佐賀で草場佩川に会っています。その大村では江戸の名儒である朝川善庵にも出会いました。また天保一五年（一八四四）には、府内藩の松平近説に召されるなどの交流がありました。

その他、天保三十六家の一人である中村半峰（元三郎）、京都の村田庫山（常道）、貫名海屋、小石元瑞、仙台の齋藤竹道など多くの文人が日田を訪れ、淡窓と交流しました。

休道他鄉多苦辛
 同袍多友自相親
 柴扉曉出寒如雪
 君汲川流我拾薪

第三章 咸宜園教育における詩作

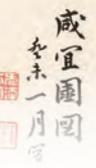
（遠思樓詩鈔と宜園百家詩）



『遠思樓詩鈔』
 初編・二編

淡窓は自身が受けてきた教育の中で、人間の情は漢詩の詩作により醸成されると考えました。そのため咸宜園教育の中に漢詩教育は重要なものとして位置づけられ、咸宜園における月旦評の進級においても試験科目とされています。

また個人としても詩作を好んでいた淡窓は、大坂の書肆を通じて自身の漢詩集である『遠思樓詩鈔』を出版し、詩人としての淡窓の評価は益々高まりました。そして咸宜園の門下生等から漢詩を集めて、出版した『宜園百家詩』により、咸宜園において詩作が盛んなことを世間に知らしめることとなりました。



咸宜園教育における詩作

荻生徂徠は門人の個性を尊重する教育を行うなかで、漢詩文を経学と同等の地位に上げ、授業において漢詩を取り扱うようになりました。徂徠学派で淡窓の師匠である亀井南冥より、その講義を受けて学んだ淡窓は、咸宜園においても漢詩文を通じて教育を行うことになりました。

淡窓は『淡窓詩話』の中で「詩ヲ作ル人ハ温潤ナリ。詩ヲ好マザルハ刻薄ナリ。詩ヲ作ル者ハ通達ナリ。詩ヲ作ラザル者ハ偏僻ナリ・・・」と述べており、人の情は詩作によって育まれていくという考えを持っていました。そこで門下生たちの詩作は咸宜園における講義のみならず、豆田町や隈町で行われた詩会や咸宜園の講義が休講となる放学の際に野外で行われた遊山（散策）の中でも詩作が行われています。

このように淡窓が漢詩教育に力を入れたのは、人間形成に重要であると考えたのはもちろんのこと、淡窓自身が詩作に対する強い愛好があったためです。後にこれが淡窓自身の漢詩集の出版に、また咸宜園門下生の漢詩集の刊行へと繋がってきます。

『遠思樓詩鈔』の刊行

淡窓の漢詩集である『遠思樓詩鈔』は初編が天保八年（一八三七）、二編が弘化五年（嘉永元年一八四八）に刊行されました。淡窓の日記によると、初編の出版の一四年前である文政六年（一八二三）九月七日に、『遠思樓詩集』を講義に使用した旨の記述が見られ、淡窓自身が詩作してきた漢詩を自身か



遠思樓詩集



遠思樓詩草

『遠思樓詩集』というタイトルでまとめられていたことがわかります。文政一三年（天保元年一八三〇）正月頃には、門下生である岡研介に宛てた書簡により、出版について動き出している様子が確認でき、翌年の文政一四年（天保二年一八三一）九月には詩集の改編がなされ、門下生の積徳令がその手伝いをしています。

詩集出版の作業途中のものと思われる『遠思樓詩草』が廣瀬家に伝わっていますが、この本には清人の顧純と韓葑という人物に序跋文を書いてもらっています。しかし後に大坂の篠崎小竹の忠告により、シーボルト事件のようなことが起こった後には取り返しがつかなくなることから、長崎に

滞留していた清人の序跋文は実際に刊行されたものからは削除されています。

その後も天保五年（一八三四）三月一四日には師匠である亀井昭陽より序文の原稿が届き、翌天保六年（一八三五）四月一三日からは校正を開始しています。また同年五月の草場佩川の書簡から、佩川へ詩集の批評を依頼していることがうかがえます。天保七年（一八三六）三月五日にはほぼ脱稿し、昭陽と佩川に添削を乞うています。

大坂の出版の記録が残る『大坂本屋仲間』には、淡窓の漢詩集は『遠思樓詩集』の書名で開板願いが出され、開板人は『多田屋佐七』で提出されています。出版当初の計画では、淡窓初期の門下生で堺で医者をしていた小林安石の紹介で、多田屋佐七に依頼したことがわかります。また後に大坂の書肆である今津屋辰三郎からは自分のところで全ての諸経費を負担してでも出版してもよい旨を伝えられています。

出版について本格的に動き出してきたところ、大坂で開塾していた淡窓の末弟・廣瀬旭荘と淡窓の間で頻繁に書簡のやりとりが見られ、序文・凡例・校訂に



廣瀬旭莊肖像画

ついて事細かに淡窓の指示を受けて、大坂の書肆と旭荘が出版に向けた作業を進めています。そして、最終的に淡窓の詩集について、大坂の書肆河内屋茂兵衛（通称河茂）が引き受けることになり、その条件は破格のものでした。

河茂は①礼本として五〇部を著者に贈る（一〇部が金二両にあたる）、②序文執筆の礼金は書林が持つ、③板下は極上の書家に頼み、その費用も書林が持つ、④出版の許可を得るための諸雑費も書林が持つ、また今後廣瀨家に関する著述に関しては同じ条件で引き受けたいというものでした。その後多田屋佐七や今津屋辰三郎、河茂などの書林間で話し合いが持たれたものと思われ、初版の見返しには「群玉堂／青藜館」と河茂と今津屋の堂号が載り、奥付には大坂の河茂・今津屋・名田屋、京都の芳野屋仁兵衛、江戸の和泉屋金石衛門の相合版となりました。

天保八年（一八三七）、出版準備も順調に進む中、二月一九日に大塩平八郎の乱が起こります。大塩は、乱の前に自身が所蔵する書籍を売却し、困窮した人々に施しますが、この時お金と交換できる施行札を印刷配布し、本屋仲間会所を借りて札と金子の交換の世話をしたのが、河内屋木（喜）兵衛・同新次郎・同記一兵衛・同茂兵衛の河内屋一統でした。そのため河茂は奉行所から厳しい叱責を受けることになり、大塩の事件がひとまず落ち着くのに翌年の天保九年（一八三八）閏四月まで

待つことになりました。

しかしこの間も出版の準備は着々と進み、天保八年五月二五日には、淡窓の元に校正刷りが届き、同年の八月二六日には無事に完成したことが旭荘の日記である『日刊瑣事備忘』に見え、同年九月二二日には完成した『遠思楼詩鈔』三〇部を携えて日田に帰郷します。その翌日、淡窓は亡き父の位牌にその詩集を供えています。

また同年一月二〇日には一〇〇部が大坂より淡窓の元に届き、早速二二日の講義より『遠思楼詩鈔』が用いられていたことが淡窓の日記よりわかります。

翌年の天保九年（一八三八）六月、大坂の本屋仲間の本屋年行司達からの許可が、八月には奉行所の許可が下りて、淡窓の漢詩集である『遠思楼詩鈔』は無事公刊されることとなりました。これまで見てきたように『詩鈔』自体は初版の日付通りに天保八年（一八三七）八月に完成しましたが、



引札「綿屋喜兵衛店」



引札「本屋安兵衛店」

江戸時代の本屋の様子
(大阪府所蔵 /Osaka Archives)

大塩平八郎の乱の影響により、公刊の許可を得て広く一般販売されるに至ったのは一年後の天保九年（一八三八）八月からとなりました。この淡窓の『詩鈔』は、淡窓の元で学び、全国に活躍していた門下生たちの力もあって大変流行し、淡窓の名はこれまで以上に知れ渡るようになりました。

『宜園百家詩』の刊行

淡窓の『遠思楼詩鈔』の刊行準備が進む中、門下生で京都にいた矢上行や大坂において開塾していた淡窓の弟である廣瀨旭荘らが中心となり、『宜園百家詩』の編集・公刊の準備が進められました。『宜園百家詩』の初編が天保一二年（一八四一）五月に、二編・三編がまとめて嘉永七年（安政元一八五四）八月に公刊されました。初編は八巻八冊、所収人数は二五人、編者は矢上行、序文は篠崎小竹。二編は六巻三冊、所収人数は一一〇人、編者は樺島芹溪、序文は河野鉄兜、三編は六巻三冊、所収人数は一九六人、編者は廣瀨貞基・山田常年・築山散水、序文は柴秋邨となっています。これは咸宜園で学んだ門下生たちを中心に、それぞれ詩作した漢詩を提出させて編集したもので、咸宜園門下の後進奨励のために出版されました。門人たちは有名無名問わず幅広く採録されています。掲載されている門下生たち全てが名を成した人物ではありませんが、故郷に帰り教育に携

廣瀨法意



『宜園百家詩』
初編・二編・三編

わった者、あるいは早逝し、あるいは姓字を改めたためにその詳細が追えなくなつた門下生など様々な人物の漢詩が掲載されていますが、この『宜園百家詩』の刊行は、咸宜園門下生らにとつて励みとなつたことでしょう。

詞華集への掲載

文政一二年（一八二九）、淡窓四八歳の時に當時名声の高かつた漢詩人一七人の詞華集である『文政十七家絶句』が出版されました。詞華集とは詩文等の選集、アンソロジーのことで、この選集には淡窓と交流のあつた菅茶山（文政一〇年に死去）や日田にも来訪した頼山陽や梁川星巖らが掲載される中、九州からは唯一同じ豊後国出身の田能村竹田が選出されており、淡窓は選ばれませんでした。

天保八年（一八三七）、淡窓は念願の自身の漢

詩集である『遠思樓詩鈔初編』を完成させ、その翌年の天保九年には公刊の許可があり、一般に広く販売されるようになりました。同年、淡窓の元に大坂の旭荘から書物が届きました。その書物とは『天保三十六家絶句』であり、江戸や京都、大坂等で活躍する漢詩人ら三六人の詞華集でした。この中に淡窓は選ばれて、七言絶句二五首が掲載されています。このことについて淡窓は、『懐旧樓筆記』の中でこのように記述しています。

「此ヨリ前、文政十七家絶句出テタリ、九州ニテハ竹田一人ヲ取レリ、此度ハ、余ト平戸の鎧軒ヲ取レリ、竹田ハ入ラス、余上國諸名家ノ中ニ列スルコト、此度ヲ以テ始トス、故ニ之ヲ録ス」とあり、九州からは肥前平戸藩の葉山高之（鎧軒）と共に淡窓も選出されており、『天保三十六家絶句』に自身の漢詩が収録されたことを喜んでいたことがうかがえます。また『文政十七家絶句』に掲載されていた竹田が今回は選ばれていないことをあえて記述していることから、『文政十七家絶句』に漏れたことが淡窓はくやしかつたのかもかもしれません。

これ以後、淡窓は詞華集が出版されるたびに、選出されるようになります。嘉永元年（一八四七）に出版された『嘉永二十五家絶句』では二二首を、その翌年の嘉永二年に出版された『撰西六家詩鈔』では五三首掲載されています。そして安政四年（一八五七）に出版された『安政三十二家

絶句』では、一五首掲載されるとともに巻頭を飾り、名実ともに江戸時代後期を代表する漢詩人となり、万人が認めるところとなりました。

実は、『安政三十二家絶句』が出版される前年の安政三年一月一日に咸宜園において淡窓は七五歳の生涯に幕を閉じました。『安政三十二絶句』は淡窓生前から編集作業に入っていたことから、淡窓はそのまま選出されたものと思われま

大詩人 廣瀬淡窓の最期

亡くなる直前の淡窓の漢詩への思いが伝わる話
が弟の旭荘の日記『日間瑣事備忘』安政三年一月一三日条に書き残されています。

この日記が書かれている時点で淡窓はすでに同年一月一日に亡くなっており、旭荘はその死をまだ知りませんでした。日記には咸宜園の廣瀬青郵（咸宜園第三代塾主）・林外（第四代塾主）から一〇月二九日付の書簡が届き、その内容が淡窓の危篤を伝えるとともに、淡窓から旭荘への伝言が記されていました。

「遠思樓前後集は猶改竄すべき処数條あり、須らく河茂に命じて改刻すべし、是我が絶筆なり、汝其れ体察せよ」

（西村天因著「亀門の二廣」二二回『大阪朝日新聞』明治四一年より引用）

旭荘の記述が確かならば、淡窓は亡くなる二日

前に旭莊宛の書簡で自身の漢詩集である『遠思楼詩鈔』初編・二編を改訂したい旨、伝えようとしています。そしてこれが淡窓最後の願い（絶筆）であるとしています。

このように亡くなる直前まで自身の漢詩集の改訂にこだわりを持っていた淡窓は、心から漢詩を愛好していたことがわかります。

淡窓は亡くなる一か月前の一〇月に自分自身で墓誌銘を撰文しました。これは自分の死後に門下生らに美辞麗句を書きならべられることを淡窓が嫌ったためです。

墓誌には、淡窓自身のことを「通儒」（広く学問に通じた学者）と称していますが、淡窓が愛好していた漢詩文については、全く触れていません。これは、当時の儒学者たちの間に詩人を卑しむところがあり、淡窓自身も漢詩人としてのみ評価されることを良しとしていなかったためと考えられます。淡窓は儒学者として敬天説を主張し、『約言』・『析玄』・『義府』・『迂言』の各著作を著すなど、学者としての自負もありました。また咸宜園には全国から淡窓を慕い、多くの門下生が集まり教育者としても成功を収めていました。

淡窓は儒学者・教育者としのみでなく、漢詩人としての評価も非常に高かったことは、詞華集に選出されたことや淡窓の詩集『遠思楼詩鈔』の版が一八版に達していることから、多くの人々に淡窓の漢詩が読み継がれていたことがわかります。

淡窓は人間形成において詩作は有益と考えて、咸宜園の中においても漢詩教育を重要視しました。また日常の日記の中に夢中の詩を記したり、亡くなる二日前まで自身の漢詩集の改訂にこだわるなど、淡窓は生涯にわたって漢詩に情熱を注ぎました。

江戸時代後期の人々にとって、淡窓は大詩人廣瀬淡窓として認識されていたに違いありません。



淡窓肖像画

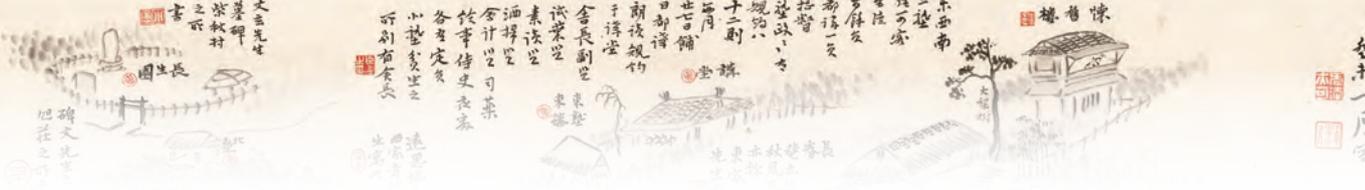


廣瀬淡窓墓（長生園） 大分県日田市（国史跡）



（左）文玄先生碑拓本、右：文玄先生碑現況

廣瀬淡窓



出品資料目録・解説

出品資料目録・解説

1 『銭塘詩集』 銭塘著 冊子木版 二冊

寛政四年（一七九二）刊



広円寺の住持である釈法蘭（号銭塘）の漢詩集。寛政四年刊。序文は大潮・服部南郭・入江南溟ら徂徠学派の面々が撰している。大潮はその序文にて、高陽谷、原双桂・法蘭を指して、九州の三才子と評している。法蘭は長福寺の釈宝月らと共に淡窓より前の世代の日田の文芸を支えた中心人物である。他の著述に『銭塘文集初編』一〇巻六冊、『同二編』三巻三冊をはじめ、多くの草稿類が今も広円寺に伝わる。幼い淡窓は法蘭・宝月らの詩会に参加するなど、漢詩文の手ほどきを受けて成長した。

2 『懐旧楼筆記』 廣瀬淡窓著 写本五六巻二八冊

公益財団法人廣瀬資料館蔵



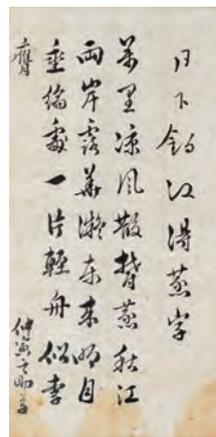
子孫に示し、戒めとするために和文（漢字力タカナ交じり）で書かれた淡窓の自叙伝。五六巻二八冊。天明二年（一七八二）の誕生

から弘化二年（一八四五）六四歳までの内容で、淡窓六五歳から六九歳の間に口述筆記させたもの。淡窓の日記が存在しない三二歳以前のことかわかる貴重な史料。展示は、天明二年四月一日の淡窓誕生の記事。淡窓の周りには俳人として著名であった伯父秋風庵月

化、同じく俳人また小説を著した父長春庵桃秋がおり、幼い頃より家庭内で教育を受け、淡窓は育つていった。

3 淡窓少年期の書 紙本墨書 軸装 一幅

公益財団法人廣瀬資料館蔵



淡窓少年期の書として伝わるもの。「仲寅之助」の「仲」とは伯父である秋風庵月化が家業に就いていた頃に日田代官揖斐十太夫政俊より賜った姓。「寅之助」は淡窓の幼名であり、六歳まで秋風庵において月化夫妻に育てられていたこともあり、一時期「仲」姓を用いたもの。夜釣りをテーマにした詩で、仰々しい語句を並べ、「後漢書」に伝の載る李膺の名まで出している。格調高く、当時流行した古文辞学派の詩風である。

月下釣江得蒸字

萬里涼風散鬱蒸秋江

兩岸露華凝東來明月

垂綸處一片輕舟似李膺

膺 仲寅之助草

万里の涼風 鬱蒸を散し

秋江の兩岸 露華凝る

東來明月 垂綸の処

一片の輕舟李膺に似たり

4 高山彦九郎和歌 紙本墨書 軸装 一幅

寛政五年（一七九三）、淡窓の父である桃秋と交流のあった勤皇の志士で、寛政三奇人の一人に挙げられる高山彦九郎が日田を訪れた。彦九郎は、一二歳の淡窓が一日で漢詩を百首詠んだことを称賛し、この和歌を遺した。彦九郎は幕府に行動を監視され、日田を発つた後に滞在していた久留米において、憂憤のあまり自刃したという。この和歌においても淡窓のことを、淡窓少年期の書と同様に「仲」と呼んでおり、「仲」姓使用は周知のものであったようである。

仲秀才のからうたう

たひける嬉しきに

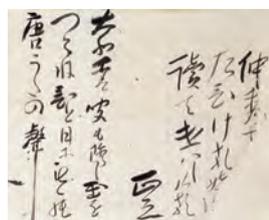
読みて遣はしける

正之

大和には聞も珍らし玉を

つらねひと日にもゝの

唐うたの声



5 廣瀬淡窓肖像画 高木豊水画 廣瀬淡窓賛（複製） 軸装 一幅 原資料は光善寺蔵



廣瀬淡窓の肖像画。現存する肖像画の中でも最も若い姿の淡窓（五〇歳前後）を描いたものとされる。咸宜園門下生であった貌姑射（木屋）石門（徳合）（福岡県八女市光善寺）が天保二年（一八三二）に咸宜園を大帰（卒業）するにあたり、高木豊水（不明く安政五

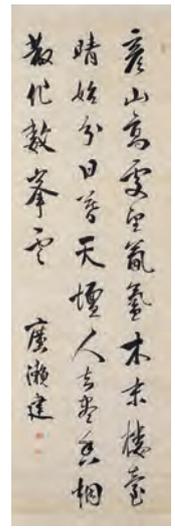
年（一八五八）に描かせたものと思われる。豊水は日田の出身で、淡窓にも学んだ後、小倉藩の御用絵師となった人物で、淡窓の『日記』や『懐旧樓筆記』の中にしばしば散見される。賛の漢詩は「徳令為余寫真索贊戲題二首」として、『遠思樓詩鈔初編卷下』に収録されている。

寫取真容行處隨 石門道者太狂痴佛恩
祖徳知多少 却拜詩壇一字師

半世功名志不伸 晚參諸佛亦前因 丹青
一掛君家壁 何羨麒麟閣上人

石門上人作予畫像索贊戲題建

6 彦山 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅



公益財団法人廣瀬資料館蔵

七言絶句。文化七年（一八一〇）九月、淡窓二十九歳の時、英彦山の上宮に登った際に詠んだもの。『遠思樓詩鈔初編』所収。淡窓二一歳の時、博多で病に臥せっていた際に、夢枕に人が現れて、病氣平癒を祈るのであれば、英彦山の神に祈るようにいわれた。言われたとおりにすると無事病気が治ったため、その時のお礼に参詣したものだ。また同月二日に、豆田の合原善兵衛の娘ナナと淡窓は結婚したこともあり、病弱な身体をできるだけすこやかにしたいと願っての参拝であった。『懐旧樓筆記』に淡窓は、頂上の上宮まで登ることが出来たが、樹木が多く、また霧のため見晴らしが悪く、天候も変わりやすいため、山の全容を見ることは出来な

かったと述べている。

彦山高處望嵐嵐木末樓臺

晴始分日暮天壇人去盡香煙

散作數峯雲 廣瀬建

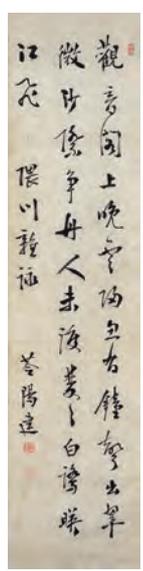
彦山 高処 望み嵐嵐

木末 樓台 晴れて始めて分る

日暮 天壇 人去り尽くし

香煙散じて 数峯の雲となる

7 隈川雑詠五首の内五首目 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅



公益財団法人廣瀬資料館蔵

七言絶句。文化八・九年（一八一一〜一二）頃の作か。淡窓三〇歳頃。三隈川の情景を詠んだ「隈川雑詠」五首中の五首目。『遠思樓詩鈔初編』所収。日田には何カ所か観音堂が存在し、この詩の指す観音閣については諸説あるが、日田盆地の東北にあたる鷹城山の永興寺（寺号は慈眼山）の城内観音閣か高瀬にある越原観音堂もしくは穴平観音庵のことと考えられる。本首の起句にあたる「観音閣上晚雲歸」は淡窓が好んだ陶淵明の「擬古」と題する詩を踏まえて作られたものと考えられる。この第五首について、篠崎小竹は、「漁洋の風致あり、神韻を以て勝る」とほめている。漁洋とは、清初の時期に神韻説を唱えた王士禎の号。神韻とは、妙なるこころのひびきをたたえた品格のある詩を指している。

観音閣上晚雲歸 忽有鐘聲出翠

微沙際 爭舟人未渡 雙々白鷺映

江飛 隈川雜詠 荅陽建

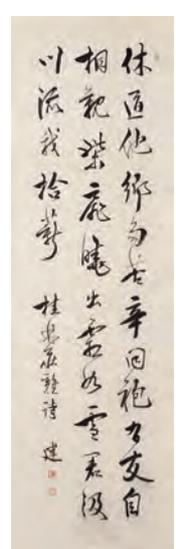
観音閣上 晚雲歸り

忽ち 鐘声の翠微を出づる有り

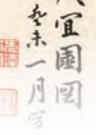
沙際 舟を争いて 人未だ渡らず

双々たる白鷺 江に映じて飛ぶ

8 桂林莊雜詠示諸生 四首の内二首目 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅 公益財団法人廣瀬資料館蔵



七言絶句。文化一二年（一八一五）前後の作か。淡窓三四歳頃。文化四年（一八〇七）六月、二六歳の淡窓は、長福寺学寮の一室を借りて教授の道に入ってから、初めて自分の塾舎を設けたのが私塾「桂林園」（桂林荘）である。文化一四年（一八一七）に「咸宜園」を設立するまでのほぼ一〇年間、桂林園において、門下生への教育に情熱を注ぎ、咸宜園教育の骨子が作られていくことになった。本詩は桂林園における情景を詠んだ「桂林莊雜詠示諸生」四首中の二首目で、淡窓の漢詩中、最も有名で人口に膾炙された「休道詩」である。『遠思樓詩鈔初編』所収。日本全国から塾に集まった若い門下生たちの一日が始まる朝の情景が詠まれた詩であり、共に学ぶ仲間の大切さを伝える名作。休道他郷多苦辛 同袍有友自 相親柴扉曉出霜如雪 君汲

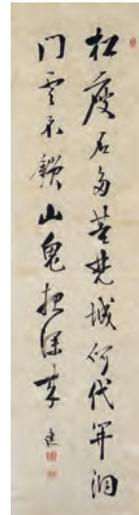


川流我拾薪 桂林莊雜詩 建

道うを休めよ 他郷 苦辛多しと
同袍 友有り 自ら相い親しむ
柴扉 暁に出づれば 霜 雪の如し
君は川流を汲め 我は薪を拾わん

9 鬼城 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅

公益財団法人廣瀬資料館蔵



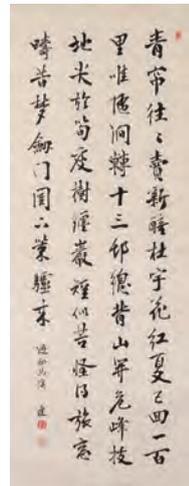
五言絶句。文政二年（一八一九）四月一日の作。淡窓三八歳。伯父の秋風庵月化のお伴として、隈川の南に遊山した時の情景を詠んだもの。館林清記（麻生伊織の兄、母は淡窓の従姉）が導き、中島益太（子玉）・井手春育（一陽）、また月化の俳諧の弟子である四日市の渡邊宗三郎らが同行した。幕末に二代歌川広重によって「豊後日田釜淵」（『諸国名所百景』所収）として描かれた釜淵を見て、鬼城に登り、鬼城観音庵において休憩し、行厨を開いている。この後、普門寺を経て、上野村では古井戸などを見て護願寺に至って、夕暮れになって咸宜園に帰っている。

松瘦石多苔梵城何代開洞
門雲不鎮山鬼夜深來 建

松瘦せて石苔多し 梵城何れの代か開きし
洞門雲鎖さず 山鬼夜深くして來たる

10 耶馬溪 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅

公益財団法人廣瀬資料館



七言律詩。文政二年（一八一九）四月の作。淡窓四八歳。対馬藩の飛び地であった肥前田代の代官から当地の学問を盛んにしたいという要請があり、田代行きの許可を得るために豊前四日市の陣屋に滞在していた日田代官塩谷大四郎へ面会するため、旅に出た時のもの。この時、淡窓の弟で廣瀬本家を継いだ久兵衛は代官の要請を受けて、四日市に近い高田の海浜、呉崎に出向いて新田開拓の事業にあたっていた。本詩は四日市往還の道中で、頼山陽が『耶馬溪函巻』を描いて絶賛した耶馬溪の山容の風景を詠んだもの。耶馬溪を淡窓が見たのは一三歳、二四歳に次いで三度目の耶馬溪であったが、若い時は山国育ちの淡窓にとつて、耶馬溪の奇岩や山水よりも豊前の海の方が新鮮で印象深かったようであるが、今回はゆっくり耶馬溪の風景を堪能している。

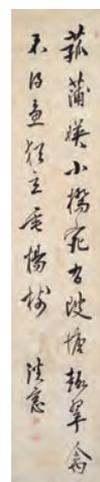
青帘往々賣新醪 杜宇花紅夏已回 一百
里唯随溪（澗） 轉十三邨聽背山開奇（危） 峯枝
地尖於筍 瘦樹纏巖短似苔 怪得旅窓
疇昔夢 劍門關下乘驢來 過耶馬溪 建

青帘往往にして新醪を賣り
杜宇花紅にして夏已に回る
一百里 唯だ溪に随つて転じ
十三村 聰て山を背にして開く

奇峯は地に投じて筍より尖り
瘦樹は巖に纏いて短苔に似たり
怪しむを得たり旅窓疇昔の夢
劍門関下 驢に乗りて來たる

11 南塲 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅

公益財団法人廣瀬資料館蔵



五言絶句。天保七年（一八三六）頃の作。淡窓五五歳。文政一三年（一八三〇）、父桃秋が住んでいた長春庵（秋風庵のこと、桃秋在住時の呼称）の東側に書齋を建てることにした。これが「梅花塲」と呼ばれた書齋である。天保三年（一八三二）、淡窓は梅花塲の南に新宅「招隠洞」を建設した。淡窓は招隠洞の各部屋に名前を付け、南側の六畳間を「心遠處」、東側の二畳間を「夜雨寮」とした。梅花塲と呼んでいた二畳二間の書齋を「醒齋」・「淡窓」の二部屋として、「梅花塲」をその園の号とした。そして新築した招隠洞の空間を「南塲」、元からあった「梅花塲」の空間を「北塲」と名付けた。本詩は文政一三年に建てられた「梅花塲」（「醒齋」・「淡窓」の二室）のあった敷地を題にした「南塲」である。『遠思樓詩鈔初編卷下』には、他にも「心遠處」、「北塲」、「醒齋」と各々題した詩が収録されている。小さな池が作られ、その上に小さな橋が架かっている庭の情景を思わせる。

菰蒲映小橋 宛有破塘趣翠禽
不得魚猶立垂楊樹 淡窓
菰蒲 小橋に映り

宛も破塘の趣き有り
翠禽 魚を得ず
猶お垂楊樹に立つ

12 心遠處 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅

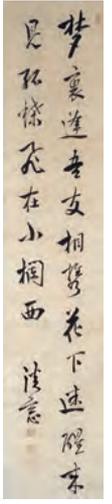
公益財団法人廣瀬資料館蔵



五言絶句。天保七年（一八三六）頃の作。淡窓五
歳。天保三年（一八三三）、梅花塙の南に新築された
「招隠洞」の一室、南側の六畳の間「心遠處」を題に
詠んだもの。『遠思楼詩鈔初編卷下』所収。心遠處と
は、車馬の往来する人境に住んでいても、心はそこか
ら遠く離れているので、心静かに暮らせる場所という意
味で、心遠處は客を迎える場として利用された。

新秀 数竿の竹
偶たま窓戸の間に当る
幽人 心おのずから遠く
必ずしも南山を見ず

13 醒齋 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅



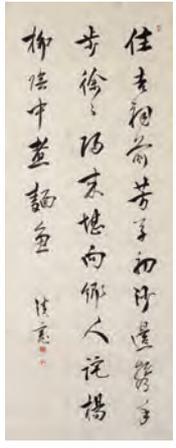
五言絶句。天保七年（一八三六）頃の作。淡窓五五歳。

淡窓の書齋である梅花塙の一室、「醒齋」について詠
んだもの。「醒齋」は淡窓の別号の一つでもある。『遠
思楼詩鈔初編卷下』所収。詩は「莊子」の胡蝶夢に通
じる世界が詠じられている。夢の中で出逢った友は、
目覚めた後に見付けた一羽の蝶だったのだろうか。淡
窓の老荘思想に心引かれる嗜好がそのまま反映したも
のと言える。醒齋を詠んだ詩は、門人の詩にもいくつ
か見る事ができ、甥の麻生直は「前掲敬天図（前に掲
ぐ敬天の図）」とその部屋の様子を記している（『宜園
百家詩』初編卷二）。

夢裏逢吾友相携花下迷 醒来
見孤蝶飛在小欄西 淡窓

夢の裏 吾が友に逢ひ
相携へて 花下に迷ふ
醒めて 孤蝶を見る
飛びて 小欄の西に在り

14 御風主人觴予那珂川上賦贈 廣瀬淡窓書 紙本墨書 軸装 一幅 公益財団法人龜陽文庫能古博物館蔵



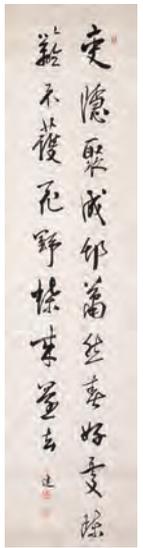
五言絶句。『遠思楼詩鈔第二編上』所収。天保一三年
（一八四二）三月、淡窓六一歳の作。この年は淡窓の
師匠である龜井塾の龜井昭陽が亡くなって、七回忌に
当たる年であった。比較的、健康状態も落ち着いてい
た淡窓は、墓参のために博多へ向かうことになった。
この時の旅では博多へ一カ月ほど滞在する長いものと

なり、博多に在住する咸宜園門下生らや文人らとの交
流、名所旧跡を訪ねる毎日を過ごしている。本詩は三
月一二日に淡窓の元を訪ねてきた米屋清蔵（御風楼主
人）と共に散歩して、住吉神社（福岡市博多区）近く
の川に至り麵魚（白魚）を捕らえる梁を見た。その側
に店があつたので清蔵の招待で酒と麵魚を淡窓は賞味
した。本詩はその時のお札として詠まれたものである。
その時のことが淡窓の『懐旧楼筆記』にも書かれてお
り、住吉で麵魚を食べたことが印象に残ったものと思
われる。この詩に対して、淡窓の門下生である恒遠醒
窓（私塾「咸春園」塾主）は、「神漁洋に似たり」と
あり、一種の神韻があり、清の詩人、王漁洋の詩に似
ていると評している。

住吉祠前芳草初沙邊攜手
徐徐歸來欲（堪）向郷人詫楊
柳陰中煮麩魚 淡窓

住吉祠前 芳草の初
沙辺に手を携えて徐徐々
帰り来たりて郷人に向いて詫らんと欲す
楊柳の陰中 麵魚を煮るを

15 春好 廣瀬淡窓 紙本墨書 軸装 一幅



五言絶句。『遠思楼詩鈔第二編上』所収。天保一三年
（一八四二）三月、淡窓六一歳の作。師匠である龜井
昭陽の墓参で博多に滞在した際に詠まれた一連の詩の
一つ。三月一二日に米屋清蔵（御風楼主人）らと住吉

出品資料目録・解説

神社近くで、麴魚を賞味した後に、春吉(福岡市中央区)に棲んでいた植村尚庵を訪ねた。当時尚庵は書をよくし、筑前の一家と知られていた。本詩はその時見た春吉の情景を詠んだもの。また同月一九日には尚庵の中島(中洲)の別荘を訪ねており、その情景を詠んだ「中島」がある。この「春好」に対して恒遠醒窓は、「思索に由らず、妙趣自然」と評し、同じく門下生の佐野東庵(医者)は「福岡博多の地は、水媚しく沙明らかに、軒窓は清雅にして、真に佳処なり。この種の作は、言は簷簷なれども、善くその神を写して、我が筑(前)の為に光を添うるに足る」とたたえている。詩語は淡々として飾るところがなく、神韻をたたえているという評価である。

吏隠聚成邨蕭然春好處 疏
籬不護花 野蝶來還去 建

吏隠 聚まりて村を成し蕭然たり春好き処
疏離花を護らず 野蝶来たりて還た去る

16 菅茶山肖像画 高橋波藍写 岡本花亭賛(複製)

原資料は個人蔵、広島県立歴史博物館寄託



文政八年(一八二五)菅茶山(一七四八~一八二七)は江戸時代後期、旧備後国安那郡川北村(広島県福山市神辺町)に居を構え、儒学者・漢詩人として、また私塾「黄葉夕陽村舎」(後に郷校となり、「廉塾」とも

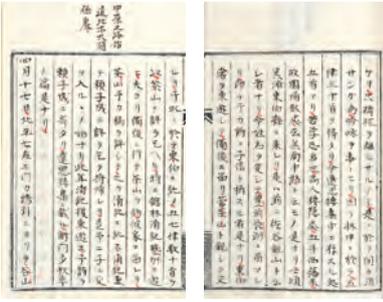
呼ばれる)を創設した教育者としても活躍した。当資料は、高橋波藍(松前藩士・蠣崎波響の門人)が白河藩の儒者田内月堂が所蔵していた「菅茶山肖像画」を写したものである。原図の作者については不明であるが、「乙酉」(文政八年)の干支を記していることから、茶山の生前の姿が画かれたもの。文政八年三月七日に江戸の感応寺で開かれた観花会において、波響が岡本花亭に對して、原図にも花亭の賛があつたので、この写しにも賛を求めて書いてもらったことがわかる。

名流雅會好春光 獨奈先生隔遠鄉
驚喜何來神妙像 欲聞言咲與花香
脈々沈々見却愁 花前有喝怎無酬
想何佳伴何佳寺 君亦看櫻尽日遊

感應寺観花会 十春詞盟出此幅 示日是茶山翁真影摹本也 原図月堂所蔵有君題贊二首 敢煩依樣一揮 余不覺歎曰 此坐欠此翁 豈非一大恨事乎 幸見此像 今日之況 不可不言 旧詩何可再贖 乃題二絶句 乙酉三月七日也 花亭居士醒翁

17 『懷旧樓筆記』 廣瀨淡窓著 写本五六卷二八冊

公益財団法人廣瀨資料館蔵



廣瀨淡窓の自叙伝『懷旧樓筆記』には菅茶山との交流について記録されている。文化五年(一八〇八)、門下生の館林清記が東遊し、備後の茶山の元を訪ねる予定があつたため、漢詩の評を頼んだ。これ以後、淡窓と茶山の交

流が茶山が亡くなるまで続いた。またその最晩年には、病床の茶山のもとに淡窓の末弟である廣瀨旭莊が訪ねて、数ヶ月間滞在した。その別れ際に茶山は淡窓宛への七言絶句二首「題廣瀨子基詩卷後」と、死期の近いことを悟っていた茶山が遺品として愛用の硯一面を旭莊に託している。



18 太真侍宴圖 菅茶山書 紙本墨書 軸装 一幅

斜川霖雨聞鈴便凝碧秋風奏樂情 一書
霓裳羽衣舞分成当日語多声 晋帥

19 『菅茶山詩鈔』 菅茶山著 廣瀨淡窓写カ 冊子
写本 一冊 (咸宜園蔵書)



公益財団法人廣瀨資料館蔵 写本。菅茶山の漢詩集である『黄葉夕陽村舎詩』の中から漢詩を選び、淡窓自身が書き写したものとと思われる。巻頭には「日益月加無尽蔵」、「宜園蔵書」の蔵書印が押され、巻末には淡窓の印である「廣瀨建印」、「子基」が押されている。

20『黄葉夕陽村舎詩』菅茶山著 冊子
木版 五冊 文化九年(一八二六)刊(咸宜園蔵書)



菅茶山の漢詩集『黄葉夕陽村舎詩』前編全八巻(四冊)および附録(一冊)。第一巻には天明以前の作である古今体八首と新樂府七首を収め、第二以降は天明三〜文化六(一七三八〜一八〇九)年までの詩が年代順に配列されている。
廣瀨資料館蔵の本資料には五冊ともに咸宜園の蔵書であること

を示す「日益月加無尽蔵」、「宜園蔵書」の蔵書印がある。全巻ともに表紙の痛みが激しいのは多くの門下生に貸し出され、広く読まれたためであろうか。



21『黄葉夕陽村舎詩後編』菅茶山著 冊子 木版 四冊
文政六年(一八二三)刊(咸宜園蔵書)
公益財団法人廣瀨資料館蔵
菅茶山の詩集『黄葉夕陽村舎詩』の後編。巻一・巻二には「前編」に漏れた詩が掲載され、巻三〜巻八までに文化七〜文政三(一八一〇〜一八二〇)年の詩が年代順に収録されている。
本資料には廣瀨資料館蔵『黄葉夕陽村舎詩』前編と同様に「日益月加無尽蔵」の蔵書印に加え、「宜園之蔵書」、「同社之外雖親戚故人不許借此」の印が押されている。前編と同様に咸宜園の多くの門下生の利用に供したものと考えられる。

22『筆のすさび』菅茶山著 冊子 木版 四冊



茶山晩年の隨筆集。廉塾を訪れた人々から聞いた奇談・身近の出来事・自然現象にまつわる事柄・天文・文化などを茶山自身の視点で書き記したものである。茶山ははじめ稿本一巻の校正を門人の木村雅寿に依頼していたが病臥したため、残りの三巻についても雅寿に委ねたもので、出版は、茶山没後の安政三年(一八五六)である。

23 頼山陽肖像画 帆足杏雨画 廣瀨旭莊賛 絹本着色 軸装 一幅
京都大学総合博物館蔵



頼山陽(一七八〇〜一八三三)は江戸後期の儒学者・漢詩人である。はじめ叔父の頼杏坪に学び、一八歳で江戸に出て尾藤二洲らに学んで翌年帰郷。二歳の時、脱藩の罪を得て、自宅に幽閉、廢嫡された。その後執筆活動に専念した。山陽著の『日本外史』は、名分論史観と勇渾な筆致で幕末の有志・知識人に愛読された。文政元年(一八一八)には、一年余り西遊し、亀井昭陽、田能村竹田、廣瀨淡窓らと交流した。その内、日田には一カ月ほど滞在した。
当資料を画いたのは咸宜園門下生の帆足杏雨であ

る。杏雨は豊後国大分郡戸次村の出身で、田能村竹田の高弟。画を竹田に学び、漢学を淡窓や帆足万里に学んだ。賛は淡窓の末弟で、咸宜園第二代塾主の後に大坂で活躍した廣瀨旭莊によるもの。天保一四年(一八四三)、旭莊が江戸に遊学した際、山陽の三男で昌平齋に学んでいた頼三樹三郎と交流があった。文政元年(一八一八)、山陽が日田を訪ねた際、旭莊は一二歳であり咸宜園において学んでいたが、山陽と面会したかは定かではない。

維與老学 天賦
絶倫夙明史冊
克間其門 偉哉
成業自有 渊源
儒之楷範 今惟
斯人
旭莊廣瀨謙拝題

24 謁加藤公廟二首 頼山陽書 紙本墨書 扁額

文政元年(一八一八)、西遊の旅に出た頼山陽は、九州諸国を回り、一月三日に日田に入った。日田では隈町の豪商である森五石の元に留まった。その間、豆田町や隈町の文人や商人らと交流した山陽は日田に多くの書を遺している。一月八日、初めて淡窓のもとを訪れた山陽は、淡窓の伯父月化と千原幸右衛門、淡窓と山陽の四人で会談し、山陽はそのまま秋風庵に泊っている。この時、淡窓が山陽に贈った詩が「席上走筆、贈頼子成」として伝わっている。また山陽も「訪廣瀨廉卿」という詩を淡窓に贈っている。同月二六日、再び山陽が館林万里(伯父月化の孫)と咸宜園を訪ねて来た。淡窓と山陽、万里と子玉(中島益太)の四人で、「加藤公の廟に謁す」という課題で二首ずつ詩作

することになった。この時に山陽が詠んだものが本資料である。この時、淡窓が詠んだ二首も『遠思楼詩鈔』初編の巻上に収録されている。後にこの会に、遅れて月化や酢屋清太郎、千原幸右衛門も同席し、皆で蕎麦を食し、明け方（五更）に及んで解散した。二月五日、一カ月近く日田に滞在した山陽は、山国に向けて発し、淡窓はこれを見送っている。

起身戚属是嬖姚 早向
雞林遠举鎌結髮軍
皆知李廣禁啼兒当
畏張遼營巢忽看鳩因
鵝血食何因狗統貂 空失
遺武巖伏臘蘇山雲
霧恨難消

鐵槍陷陣効馳驅阿
帟獨擗敵万夫苦戰
辺風曾墮拔凱旋朔雪
尚吹潔 經營遺愛千乘
国願望関心六尺弧 扞道
夜又還類仏豐碑字々
頌帰停



25 『耶馬溪図巻』 頼山陽書画卷子 個人蔵
耶馬溪は大分県北部の山国川の上流・中流約五〇キロにわたる名勝の地で、奇岩と渓谷の美で知られている。もとは山国谷と言ったのを、雅名を選んで中国風に称したもので、頼山陽がその名付け親となった。文化一三年（一八一六）二月に山陽の父である頼春水が広島で没し、文政元年（一八一八）二月、父の三回忌法要のために京都から広島へ帰った。山陽は、その足で九州各地へ旅に出かけ、肥前・肥後・薩摩・大隅の国々を経て、日田に一カ月ほど滞在し、咸宜園の廣瀬淡窓や豆田・隈町の豪商や文人らと交流した。その後、中津の正行寺の住持である末廣雲華を訪ねる途中に耶馬溪をとおり、その風景を画いた。京都に帰って後、山陽は耶馬溪の風景を画き直し、一大横巻に作り、雲華に贈った。その後文政一二年（一八二九）に橋本元吉の求めに応じて画いて贈られたのが本資料である。



26 『日本外史』 頼山陽著 冊子 木版 二・三巻 三冊 公益財団法人廣瀬資料館蔵
源平二氏から徳川氏に至る武家七〇〇年間の歴史書。二〇台前半から執筆を始め、文政一〇年（一八二七）には脱稿し、山陽没後の天保七年（一八三六）、八年頃に出版された。本書は幕末を経て明治初年に至るま



で大変流行し、その版を重ねた。本書には咸宜園の蔵書であることを示す、「宜園之蔵書」、「日益月加無尽蔵」、「同社之外雖親戚故人不許借此」の蔵書印が押されている。また

見返しにはこの本書を読んだと思われる門下生の名（明治期の門下生）が墨書されている。二巻表紙には、「南豊日田」、「咸宜園珍藏」、「廣瀬淡窓先生」などの墨書が見られるが、淡窓期からの蔵書かは定かではないが、多くの門下生に読まれたものと思われる。

27 『新策』 頼山陽著 冊子 木版 五巻四冊 公益財団法人廣瀬資料館蔵
「八義」、「六略」、「二十三策」を合わせて、編集されたもので、後に『通議』の底本となる。原本は六巻であるが、五巻に収めたもの。本書の巻頭には「日益月加無尽蔵」、「宜園蔵書」の咸宜園蔵書印が押される。また巻末にも「南豊 日田 南豆 田邨 咸宜園蔵書」等の墨書が見られ、咸宜園門下生らによって読まれたものと思われる。



28 『日本外史』 頼山陽著 冊子 木版 二・三巻 三冊 公益財団法人廣瀬資料館蔵
源平二氏から徳川氏に至る武家七〇〇年間の歴史書。二〇台前半から執筆を始め、文政一〇年（一八二七）には脱稿し、山陽没後の天保七年（一八三六）、八年頃に出版された。本書は幕末を経て明治初年に至るま

戊寅十一月廿六日夜過
咸宜園与
廉卿 萬里子玉 諸子同
賦此詩余韵偶与
萬里同必有雷同者乃疾
書相似巧拙穩否姑不
違恤也
襄

29 『日本外史』 頼山陽著 冊子 木版 二・三巻 三冊 公益財団法人廣瀬資料館蔵
源平二氏から徳川氏に至る武家七〇〇年間の歴史書。二〇台前半から執筆を始め、文政一〇年（一八二七）には脱稿し、山陽没後の天保七年（一八三六）、八年頃に出版された。本書は幕末を経て明治初年に至るま

28 『通議』頼山陽著 冊子 写本 二冊(天・地)
(廣瀬旭莊藏書)



公益財団法人廣瀬資料館蔵
和漢の法制・経済・軍制等を論じた二八編の漢文体の策論。前代を借りて当代の政治の得失を論評することを目的とした。天保三年(一八三二)に成り、弘化四年に刊行された。本書はその写本であり、巻頭に「旭莊珍藏」の蔵書印が押されている。写本も旭莊の手によるものか。

29 『日本政記』頼山陽著 冊子 木版 一六卷一六冊
(咸宜園蔵書)



公益財団法人廣瀬資料館蔵
神武天皇から後陽成天皇に至る一〇八代、二〇〇〇年間の歴史を編年体で記述したもので、九二編の史論を併せた漢文体の日本史。山陽晩年の作。『日本外史』完成後に著述に力を入れ、史論の部分はほぼ完了したが、記事は一部未完成のまま弟子の関藤藤陰らに後を委ねて没した。本書には咸宜園の蔵書であることを示す、「宜園之蔵書」、「同社之外雖親戚故人不許借此」、「日益月加無尽蔵」の蔵書印が押される。

30 『遠思楼詩鈔』 冊子 木版
初編(二冊)・二編(二冊)



天保八年(一八三七)、淡窓五六歳の時にそれまでの自身の漢詩をまとめて初編二巻を刊行し、嘉永二年(一八四九)、

六八歳の時、それ以降の詩をまとめて第二編二巻を刊行。淡窓は菅茶山(二七四八〜一八二七)、頼山陽(一七八〇〜一八三二)と並び江戸後期の三大漢詩人といわれ、当時この詩集は、大坂において他の二人をしのぐ人気を得たと、大坂に滞在していた旭莊が淡窓に伝えている。

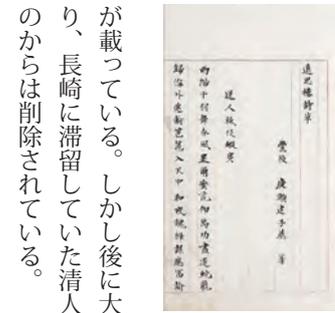
31 『遠思楼詩集』廣瀬淡窓著 冊子 写本
(咸宜園蔵書)



公益財団法人廣瀬資料館蔵
写本。『遠思楼詩鈔』刊本の元になったものと思われる。文政六年(一八二三)九月七日の淡窓の日記に咸宜園の講義で使用されているのがわかる。漢詩の講義に用いる中で詩集の出版のために推敲を重ねていった。

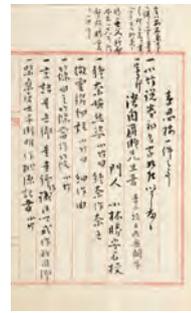
32 『遠思楼詩草』廣瀬淡窓著 冊子 写本
公益財団法人廣瀬資料館蔵

写本。『遠思楼詩集』に更に手を加えて、編集したもの。天保四年(一八四三)五月三日の日記に春楨介から手



紙が届き、中には清人が『遠思楼詩草』を批評した文が入っていたと記録されており、本書の序跋文には顧純と韓葑という清人の文章が載っている。しかし後に大坂の篠崎小竹の忠告により、長崎に滞留していた清人の序跋文は刊行されたものからは削除されている。

33 「廣瀬淡窓宛廣瀬旭莊・小林安石書簡」一冊子
公益財団法人廣瀬資料館蔵

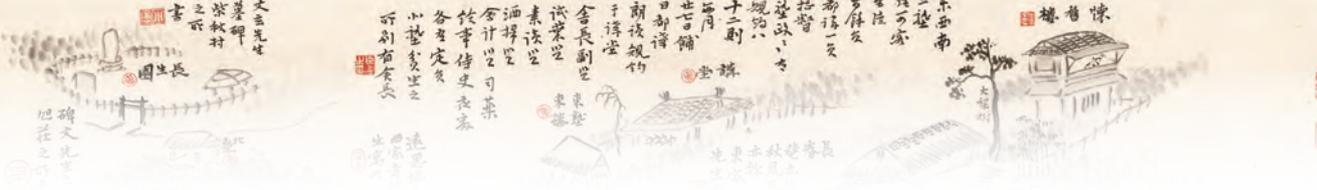
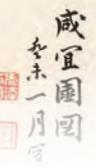


廣瀬淡窓宛に送られた書簡を書き留めたもの。八月一日付の旭莊の書簡には、咸宜園出身の有田大助を通じて、河内屋茂兵衛(通

称河茂)が好条件で詩集の出版を引き受けたいとの旨を伝えている。それを受けて、大坂の旭莊と咸宜園出身で堺で医者をしていた小林安石が河茂と面談しており、最終的には河茂が引き受けることになった。その後、淡窓と旭莊との間で頻りに詩集出版にあたって、書簡のやりとりが行なわれており、『遠思楼詩鈔』の出版は旭莊をはじめとした京摂在住の門下生らの助力が大きかったことがわかる。

34 『宜園百家詩』 冊子 初編(矢上快雨編) 八巻四冊 天保十一年(一八四〇)刊 二編(樺島芹溪編)

六巻三冊 嘉永七年(一八五四)刊 三編(廣瀬棟園ら編) 六巻三冊 嘉永七年(一八四五)刊
咸宜園の門下生や交流のあった人々の漢詩を集めた漢



出品資料目録・解説



詩集。初・二・三編併せて掲載人数は五九名であり、初編は天保一二年(一八四一)、二編・三編は嘉永七年(一八五四)に刊行された。

刊行の目的は、咸宜園門下の後進奨励のためであり、掲載された門人たちは有名無名問わず幅広く採録されないが、故郷に帰り教育に携わった者、あるいは早逝し、あるいは姓字を改めたためにその詳細が追えなくなった門下生など様々な人物の漢詩が掲載されており、咸宜園門下生を研究する上でも重要な資料。『宜園百家詩』の刊行は、咸宜園で学ぶ門下生らにとつて励みになったと考えられる。

35『文政十七家絶句』玉香主人編 冊子 木版 二巻 二冊 文政一二年(一八二九)刊(咸宜園蔵書)



公益財団法人廣瀨資料館蔵
幕末から明治時代にかけて、書名に元号を冠し、その元号の時代に活躍した著名な漢詩人の七言絶句のみを集めた時代別絶句集で詞華集の一つ。本資料はその内の文政一二年に刊行されたもので、広島の書肆文藻堂の主人加藤淵(香園・玉香主人)の編。著名な一七家の絶句五〇〇首を収め

ている。一七家は、菅茶山、市川米庵寛齋、頼杏坪、館柳湾、柏木如亭、大窪詩仏、菊池五山、波多橋洲、田能村竹田、巻菱湖、貫名海屋、梅辻春樵、中島棕隠、頼山陽、祝星齡、摩島松南の諸氏で、九州からは唯一豊後国の田能村竹田が掲載されている。



36『天保三十六家絶句』三上恒編 冊子 木版 三巻 三冊 天保九年(一八三八)刊

時代別絶句集の一つ。天保の三六家の七言絶句一二五首を収める。三六家は、朝川善庵、大窪詩仏、岡本花亭、菊池五山、西島蘭溪、山地蕉窓、宮沢雲山、梁川星巖、塩田随斎、諸葛中如、守村鷗嶼、館柳湾、摩島松南、貫名海屋、中島棕隠、牧鸞庵、門田朴齋、頼山陽、篠崎小竹、廣瀨淡窓、後藤春草、野呂松廬、垣内

溪琴、原田霞裳、石雲嶺、小原梅坡、中村岳洲、稲垣研岳、釈南山ら諸氏。九州からは淡窓と肥前平戸の葉山鑑軒が掲載されている。天保九年、大坂の旭荘より『天保三十六家絶句』が届き、「此ヨリ前、文政十七家絶句出テタリ、九州ニテハ竹田一人ヲ取レリ、此度ハ、余ト平戸の鑑軒ヲ取レリ、竹田ハ入ラス、余上國諸名家ノ中ニ列スルコト、此度ヲ以テ始トス、故ニ之ヲ録ス」とあり、掲載されたことを喜んでゐる。淡窓の七絶二五首が掲載されている。

37『嘉永二十五家絶句』北尾墨香編 冊子 木版 四巻 四冊 嘉永元年(一八四八)刊



時代別絶句集の一つ。嘉永の二五家の七言絶句九六六首を収める。二五家は、梁川星巖、貫名海屋、中島棕隠、牧鸞齋、池内陶門、猪飼敬所、菊池五山、安積良齋、野田笛浦、西島蘭溪、大沼枕山、石川竹崖、塩田随斎、篠崎小竹、後藤春草、奥野小山、廣瀨淡窓、草場佩川、朝川善庵、大槻磐溪、廣瀨旭莊、菊池溪琴、沢熊山、橋本静庵、釈南園ら諸氏。天保に引き続き、淡窓が掲載されている。淡窓の七絶二二首が掲載されている。

38『撰西六家詩鈔』北尾墨香編 冊子 木版 六巻 〇冊 嘉永二年(一八四九)刊(廣瀨旭莊蔵書)

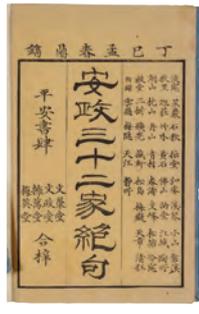


公益財団法人廣瀨資料館蔵
撰津以西の六大詩家の詩を選び古今体詩六四二首を集めた詞華集。六大詩家は、篠崎小竹、廣瀨淡窓、草場佩川、後藤松陰、廣瀨旭莊、坂井虎山ら諸氏。安積良齋の序がある。淡窓の漢詩五三首が掲載されている。



39『安政三十二家絶句』 額田正編 冊子 木版 三卷
三冊 安政四年(一八五七)刊

公益財団法人廣瀨資料館蔵



時代別絶句集の一つ。
安政の三二家の七言絶句六一八首(付録一三一首)を収める。
三二家は、廣瀨淡窓、梁川星巖、劉石秋、齋藤拙堂、藤森弘庵、菊池溪琴、奥野小山、大槻磐溪、安藤秋里、廣瀬旭莊、岡本黄石、藤井竹外、村上佛山、篠崎訥堂、松崎江城、横山湖山、池内陶所、大沼枕山、草場船山、廣瀨青邨、森春濤、頼支峰、鈴木松塘、劉冷窓、鷺津穀堂、頼三樹、河野鉄兜、齋藤誠軒、家里松島、积梅痴、积天章、积月性、なお付録として石野雪嶺、尾池梅隱、江馬天江、渡辺精所ら諸氏を取めている。淡窓を筆頭に梁川星巖や齋藤拙堂の名が並び、九州では咸宜園の影響を受けた私塾「水哉園」塾主である村上佛山や草場佩川の息子の草場船山などの名が見える。咸宜園出身者では廣瀨旭莊や廣瀨青邨、劉君鳳(掲載名は石秋)、劉冷窓(石舟の長子)などの名前が見え、咸宜園の門人らも当代一流の漢詩人として認められていたことがわかる。

40『淡窓小品』 廣瀨淡窓著 冊子 木版 二卷二冊
一名「鼠壤餘蔬」。「莊子」天道篇にある、土成綺が老子を聖人ではないと罵った時の言葉「鼠壤余蔬、而棄妹不仁也(鼠壤に余蔬あるに、妹を棄てしは不仁なり)」から付けられたもの。淡窓の日記によれば、安政二年(一八五五)九月二日に新たに旧作の漢文を編集して、



この日から本書の講義を開始して、同年一月二一日に脱稿した二冊を、大坂の旭莊に送り、出版に向けて準備に入ったという。旭莊の長男で淡窓の養子となった林外の日記『林外日記』によれば、安政三年六月九日には版本になった。内容は題跋・賛序などの漢文集で、附録に詩を収める。詩は五言律詩三首、五言絶句一六首、七言律詩二六首、七言絶句五首が掲載される。淡窓の語録及び詩文を取めたもの。刊行された『遠思楼詩鈔二編』以降の漢詩なども収録されている。諸版には奥付がないもの、嘉永二年(一八四九)の『遠思楼詩鈔二編』奥付を流用したもの、年次なしの河茂他一〇肆板などの後摺り、後には「遠思楼詩鈔三編」と改題されて刊行されたものもあるという。

41『淡窓詩話』 廣瀨青邨編 冊子 二卷〇冊
明治一六年(一八八三)刊



淡窓が門人の問いに答えて、詩の諸体、作詩の法、詩書、古人近人の詩、詩の妙味、作詩の心境などについて語った言葉を、淡窓の養子で咸宜園第三代塾主を務めた廣瀨青邨が整理編集した。詩の意義について、淡窓は「詩は情を述ぶる」ものだとし、詩を作る態度について、「詩を作るには、壁立千仞の氣象あること

を要す」と厳しい心構えと絶ゆまぬ修養の必要を述べている。詩作の要訣については、「詩を学ぶ者は、努めてその才識を養うべし。才を養ふは推敲鍛練にあり。識を養ふは古人の詩を熟讀するに在り」とし、才能を養うには推敲鍛練が必要であり、見識を養うには古今の詩人のすぐれた詩を熟讀することだとしている。

42廣瀨淡窓肖像画 柏木蜂溪画 平野五岳賛(複製)
軸装 一幅



原資料公益財団法人廣瀨資料館蔵

廣瀨淡窓の肖像画。淡窓肖像の中で最も流布し、親しまれているもの。淡窓六一歳の天保一三年(一八四二)一二月、江戸幕府より永世苗字帯刀を許された頃の肖像と考えられる。画は幕末の絵師で、千束藩(小倉藩)の支藩、現在の福岡県豊前市)の御用絵師であった柏木蜂溪(不明)明治一二年(一八七九)によるもの。蜂溪の師匠は日田出身の高木豊水であり、豊水は淡窓の父・桃秋の肖像画や光善寺蔵の廣瀨淡窓肖像画を画いた人物。賛は淡窓の門下生で、三絶(詩・書・画)僧と謳われた平野五岳(日田市専念寺住持)。

官途早絶折腰縁、竈命猶来五柳邊、才萃一門傳道統、名流四海執文權、青雲爭路爾為爾、白首談經玄又玄、不許取魚都講進、任他鶴雀噪堂前

門人五岳拝題

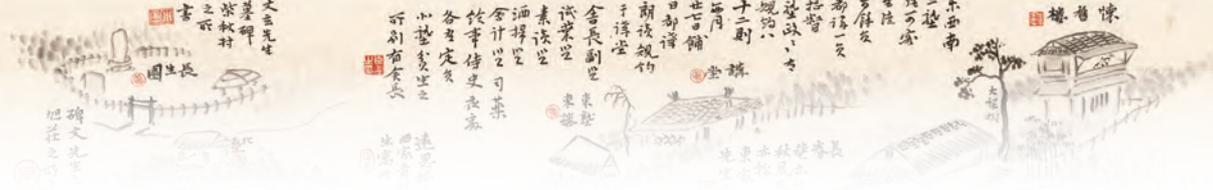
平成 26 年度咸宜園研究センター特別展 展示品目録

No.	展示資料名	点数	法 量	所 蔵 先	備 考
1	『錢塘詩集』	2	縦 26.1 横 17.7	日田市	冊子 木版 釈法蘭著
2	『懷旧樓筆記』(巻 1)	1	縦 22.6 横 16.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本 廣瀬淡窓の自叙伝
3	淡窓少年期の書	1	縦 34.2 横 16.8	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装 仲寅之助書
4	高山彦九郎和歌	1	縦 28.9 横 35.4	日田市	紙本墨書 軸装
5	廣瀬淡窓肖像画	1	縦 107.6 横 35.6	日田市	複製 高木豊水画 廣瀬淡窓賛
6	彦山	1	縦 130.3 横 39.3	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
7	隈川雑詠五首の内五首目	1	縦 104.2 横 24.8	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
8	桂林荘雑詠示諸生 四首の内二首目	1	縦 130.6 横 39.5	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
9	鬼城	1	縦 103.8 横 27.0	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
10	耶馬溪	1	縦 111.5 横 41.4	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
11	南場	1	縦 126.5 横 25.0	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
12	心遠處	1	縦 68.4 横 21.9	公益財団法人廣瀬資料館	紙本墨書 軸装
13	醒齋	1	縦 120.1 横 24.0	日田市	紙本墨書 軸装
14	御風主人觴予那珂川上賦贈	1	縦 123.5 横 46.9	公益財団法人亀陽文庫能古博物館	紙本墨書 軸装
15	春好	1	縦 124.5 横 29.8	日田市	紙本墨書 軸装
16	菅茶山肖像画	1	縦 96.2 横 36.3	原資料は個人蔵、広島県立歴史博物館寄託	複製 軸装 高橋波藍写 岡本花亭賛
17	『懷旧樓筆記』(巻 12)	1	縦 22.6 横 16.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本 廣瀬淡窓の自叙伝
18	太眞侍宴図	1	縦 129.3 横 26.0	日田市	紙本墨書 軸装
19	『菅茶山詩鈔』	1	縦 22.4 横 14.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本 咸宜園蔵書
20	『黄葉夕陽村舎詩』	5	縦 24.9 横 17.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 菅茶山著 咸宜園蔵書
21	『黄葉夕陽村舎詩後編』	4	縦 24.9 横 17.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 菅茶山著 咸宜園蔵書
22	『筆のすさび』	4	縦 25.5 横 17.7	日田市	冊子 木版 菅茶山著
23	頼山陽肖像画	1	縦 98.8 横 40.5	京都大学総合博物館	絹本着色 軸装 帆足杏雨画 廣瀬旭莊賛
24	謁加藤公廟二首	1	縦 80.6 横 28.2	日田市	紙本墨書 扁額
25	『耶馬溪図巻』	1	縦 400.9 横 34.2	個人	絹本墨書 卷子
26	『日本外史』	22	縦 25.1 横 17.8	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 咸宜園蔵書
27	『新策』	4	縦 25.5 横 17.4	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 咸宜園蔵書
28	『通議』	2	縦 24.4 横 17.2	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本 廣瀬旭莊蔵書
29	『日本政記』	16	縦 25.3 横 18.0	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 咸宜園蔵書
30	『遠思楼詩鈔』初編・二編	4	縦 22.9 横 14.4	日田市	冊子 木版 初編上・下、二編上・下
31	『遠思楼詩集』	1	縦 22.6 横 14.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本 咸宜園蔵書
32	『遠思楼詩草』	1	縦 23.7 横 16.2	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本
33	「廣瀬淡窓宛廣瀬旭莊・小林安石書簡」	1	縦 24.9 横 17.1	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 写本
34	『宜園百家詩』	12	縦 22.4 横 14.6	日田市	冊子 木版 初編・二編・三編
35	『文政十七家絶句』	2	縦 22.8 横 18.3	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 咸宜園蔵書
36	『天保三十六家絶句』	3	縦 22.2 横 15.2	日田市	冊子 木版
37	『嘉永二十五家絶句』	4	縦 22.3 横 15.4	日田市	冊子 木版
38	『撰西六家詩鈔』	6	縦 23.4 横 16.5	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版 廣瀬旭莊蔵書
39	『安政三十二家絶句』	3	縦 22.1 横 15.1	公益財団法人廣瀬資料館	冊子 木版
40	『淡窓小品』	2	縦 22.2 横 15.5	日田市	冊子 木版
41	『淡窓詩話』	2	縦 20.3 横 13.5	日田市	冊子 木版
42	廣瀬淡窓肖像	1	縦 86.2 横 24.3	日田市	複製 軸装 柏木峰溪画 平野五岳賛

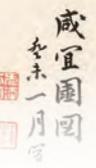


主な参考文献

『淡窓遺墨撰集』 一九六六 廣瀬淡窓遺墨刊行会
 日田郡教育会編『増補淡窓全集』 一九七一 思文閣出版
 工藤豊彦『広瀬淡窓・広瀬旭荘』叢書・日本の思想家三五 一九七八 明德出版
 『日本古典文学大事典』一九八三〜八五 岩波書店
 『日本漢文学大事典』一九八五 明治書院
 『ふるさと豊前中津の会』一九八八
 岡村繁注『広瀬淡窓 広瀬旭荘』江戸漢詩人選集第九卷 一九九一 岩波書店
 『新収咸資料展』一九九四 広島県立歴史博物館
 『菅茶山と頼家の人々』一九九六 菅茶山記念館
 『菅茶山略年表(草稿)』一九九八 神辺町教育委員会菅茶山記念館
 林田愼之助『広瀬淡窓』日本漢詩人選集二五 二〇〇五 研文出版
 『近世の学び舎』寺小屋く私塾く藩校へ 二〇〇五 財団法人かなべ文化振興会菅茶山記念館
 『頼山陽の書風』二〇二〇 公益財団法人頼山陽記念文化財団
 『菅茶山と化政文化を彩る七人の巨人たち』菅茶山とその世界Ⅳ 二〇一二 広島県立歴史博物館
 『廣瀬淡窓と咸宜園・近世日本の教育遺産として』二〇一三 日田市教育委員会
 『咸宜園教育センター研究紀要』第三号 二〇一四 日田市教育委員会
 高橋昌彦『廣瀬淡窓』大分県先哲叢書 二〇一四 大分県教育委員会
 『近世文人の世界』―神辺に花開いた文化― 二〇一四 広島県立歴史博物館

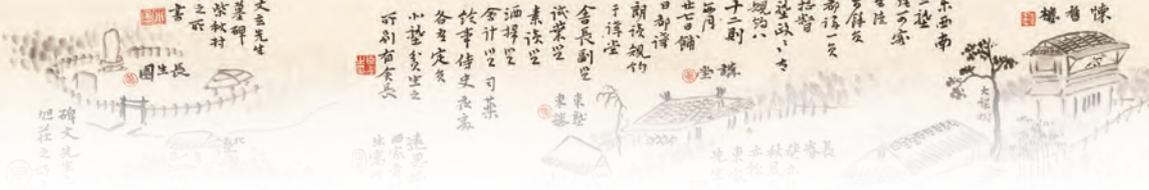


漢詩人廣瀨淡窓関連略年表



和暦 西暦 年齢 事項

和暦	西暦	年齢	事項
延宝元年	一六七三		廣瀨家の始祖、五左衛門が筑前博多から豊後日田へ転住
天明元年	一七八一		伯父「月化」が秋風庵を建てる
天明二年	一七八二	1歳	4月11日、豆田魚町で廣瀨三郎右衛門（桃秋）、母ユイの長男として誕生、幼名寅之助
天明三年	一七八三	2歳	秋風庵にて伯父月化夫婦に六歳まで養育される
天明七年	一七八七	6歳	魚町の実家に帰り、父母の下で読書・習字を習う
天明八年	一七八八	7歳	父から「孝経」「四書」を学ぶ
寛政元年	一七八九	8歳	浜田屋忠三郎や後藤方大に「論語」の句読を学ぶ
寛政二年	一七九〇	9歳	冬、長福寺法幢上人から「詩経」の句読を学ぶ 9月、頼宮四極から「書経」「春秋」「文選」の講義を聞く 9月、頼宮四極から「蒙求」「漢書」「文選」等の講義を聞く
寛政三年	一七九一	10歳	松下西洋（筑陰）の弟子になり漢詩・文章の添削や「十八史略」を学ぶ
寛政四年	一七九二	11歳	四極の家に通い、「蒙求」「漢書」「文選」を教わる 四極の勧めで、竹田村の広円寺法蘭上人に詩文を習う
寛政五年	一七九三	12歳	亀井南冥に学んだ法幢の弟法海に五言律詩を学び添削を請う 法幢を中心として日田の各地で催された詩会に参加
寛政六年	一七九四	13歳	西洋の指導のもとで、一日百首の会を自宅楼上で行う 高山彦九郎から賞讃され和歌を贈られる
寛政七年	一七九五	14歳	6月、元服
寛政八年	一七九六	15歳	4月、佐伯遊学。西洋のもとで藩校四教堂の生徒らと学ぶ 8月、佐伯城下を辞し帰郷
寛政九年	一七九六	16歳	8月、福岡亀井塾から旅人の入塾を断られる（南冥、塾居） 昭陽弟大門や南冥弟曇采を訪ね、秋月で原古処と会う
寛政一〇年	一七九八	17歳	内山玄斐の養子となり「内山玄簡」として亀井塾に入門 2月、亀井塾が火事になり、急いで戻り後片付けて日田に帰る 夏頃、昭陽が姪の浜に開設した甘古堂に寄宿し従学する
寛政一一年	一七九九	18歳	9月上旬、亀井塾に再度入塾する 12月、大病により亀井塾を退塾し、帰郷（在塾期間は二年足らず）
寛政二二年	一八〇〇	19歳	1月、病状きわめて悪化（三大厄のひとつ） 冬の初め、豪潮律師が大超寺に来る
享和元年	一八〇一	20歳	2月、甘木・秋月に遊ぶ。亀井南冥に会い、原古処を訪ねる
享和二年	一八〇二	21歳	日山より帆足萬里が来訪 はじめて「孟子」を講じる
享和三年	一八〇三	22歳	体調を大いに崩し、保養につとめる
文化元年	一八〇四	23歳	対馬藩田代領から学問所の教授に招かれたが辞退する 冬、倉重湊の忠言により教育の道を決意
文化二年	一八〇五	24歳	3月、豆田町の長福寺学寮にて講学を開始 6月、長福寺を引き払い南家の土蔵で教授 8月、転居し「成章舎」と名づける
文化三年	一八〇六	25歳	春から5月まで成章舎、その後は南家の土蔵で教授
文化四年	一八〇七	26歳	5月17日、弟謙吉（旭荘）誕生 6月、「桂林園」を建築、塾を移転する11月、伝染病の大病（三大厄のひとつ）
文化五年	一八〇八	27歳	菅茶山、頼山陽に詩の評を請う
文化七年	一八一〇	29歳	9月2日、合原善兵衛の娘ナナ（20歳）と結婚 9月、英彦山を参詣、病氣平癒を祈願
文化九年	一八一二	31歳	2月22日、母ユイ没す（48歳）
文化一〇年	一八一三	32歳	8月23日、日記をつけ始める
文化一二年	一八一四	33歳	11月14日、「史記」の論議（奪席会）を行う 3月3日、日山の帆足萬里から自作の詩二篇が贈られる 3月19日、亀井南冥の葬儀に出席するため出発する
文化一二年	一八一五	34歳	6月、秋月より原古処が来訪
文化一四年	一八一七	36歳	12月28日、弟の久兵衛が廣瀨家第六世となる 2月、「桂林園」を移築し、「咸宜園」と称す
文政元年	一八一八	37歳	8月24日、書斎の「遠思楼」（西家側）が完成 10月25日、塩谷大四郎正義代官が着任
文政二年	一八一九	38歳	11月8日、頼山陽が館林清記に導かれ日田に来遊 5月23日、森荊田宅に赴き、田能村竹田に会う
文政三年	一八二〇	39歳	9月22日、塩谷代官より用人格に任命される 9月23日、秋月藩儒の原古処が娘采頼らを連れて来訪
文政四年	一八二一	40歳	9月23日、秋月藩儒の原古処が娘采頼らを連れて来訪 3月5日、講堂（初代東塾）が完成する
文政五年	一八二二	41歳	6月2日、塩谷が代官から西国筋群代に昇進
文政六年	一八二三	42歳	2月25日、鶴崎の毛利空桑が来見
文政七年	一八二四	43歳	2月13日、弟謙吉（旭荘）を養子にする
文政八年	一八二五	44歳	9月20日、美濃の梁川星巖が妻を連れて来訪 2月25日、田能村竹田が来訪（4月7日・8月18日も） 大病（三大厄のひとつ）



文政九年 一八二六 45歳
3月、書齋「淡窓」に菅茶山の扁額を掲げる
10月、浮殿（豊後高田）に分校を開塾
文政十年 一八二七 46歳
4月、旭荘が讃岐金毘羅へ参詣し、菅茶山の塾に数カ月滞在する
9月、旭荘が帰郷し、茶山の詩をもたらす

文政二年 一八二九 48歳
4月8日、豊前滞在中の郡代を訪ねる、浮殿で講義を行う
5月10日、肥前の対馬藩田代領の招聘により東明館で教授する
天保元年 一八三〇 49歳
閏3月5日、旭荘を第二代塾主とする
4月、塩谷代官の塾介入が始まる
5月16日、書齋「梅花塙」の新築工事が始まる
天保二年 一八三一 50歳
4月28日、「官府の難」起こる
天保三年 一八三二 51歳
4月22日、伯父月下の「秋風庵遺稿」を校訂し弟三右衛門に出版を託す
11月9日、旭荘が筑後吉木の神職合原安芸守の娘マツと結婚する
12月4日、新棟「招隠洞」が完成
5月11日、郡代の意向により、再び淡窓が塾政を執る
9月、11月末、病床に伏す、『遠思楼詩鈔』の編纂を思い立つ

天保四年 一八三三 52歳
12月3日、塾政を再び旭荘に任せる
天保五年 一八三四 53歳
10月5日、父桃秋、没す（84歳）
天保六年 一八三五 54歳
1月28日、旭荘が西遊のため、淡窓が塾政を執る
7月12日、塾政を旭荘に返す
7月、「万善簿」を開始
4月、旭荘が東遊、淡窓が再び塾主となる
5月17日、亀井昭陽が死去
9月29日、旭荘の子孝之助（林外）が生まれる
9月22日、旭荘が東遊より帰省し、『遠思楼詩鈔』初編30部を持ち帰る
5月14日、淡窓の漢詩が採録された『天保三十六絶句』が大坂から届く
6月6日、「宜園百家詩」一編を編纂
2月3日、矢野範治（青邨）が都講となる
4月20日、『遠思楼詩鈔』版元の河内屋茂兵衛（河茂）が

天保十年 一八三九 58歳

天保二年 一八四一 60歳
7月9日、旭荘が大坂から『宜園百家詩』の新刻二百余部をもたらす
8月2日、9月5日、大坂に戻る旭荘を下関まで見送る
9月8日、11月26日、大村藩で出張講義を行う
11月、長崎に遊ぶ
12月、幕府より永世苗字帯刀を許される
6月、矢野範治（青邨）を養子とする
9月7日、27日、府内藩で出張講義を行う
1月19日、幕府の臣籍に入る
3月、大村藩で出張講義を行う
4月、長崎に再遊し唐蘭館を見学
5月8日、6月3日、府内藩校で講義
7月29日、『遠思楼詩鈔』二編が成る
5月8日、新塾（南塾か）が竣工し塾生を移居させる
8月21日、『遠思楼詩鈔』続編を脱稿し大坂の旭荘に送る
1月29日、『万善簿』一万善を完了
1月22日、青邨を旭荘の弟とする
4月4日、『遠思楼詩鈔』二編が出版される
5月11日、遠思楼を建てる
6月7日、『懐旧楼筆記』56巻28冊の表装が完成
9月18日、旭荘を弟に復し、孝之助（林外）を養子にする
7月6日、『宜園百家詩』続編の編纂が終わり、大坂へ送る
1月22日、池田代官に従い田代へ赴き勘定奉行川路聖謨と会う
8月29日、『宜園百家詩』第二編・第三編の刊本が大坂より届く
3月16日、青邨を第三代塾主とするも、教授は引き続き行う
2月21日、この日を最後に自筆の日記が途絶える
10月、旭荘に絶筆としての手紙を送り、『遠思楼詩鈔』の改訂を伝えた
11月1日、没す
葬儀に千数百人が参列、長生園に葬られる
私塾「咸宜園」を閉塾する

天保三年 一八四二 61歳

弘化元年 一八四四 63歳

弘化二年 一八四五 64歳

弘化三年 一八四六 65歳

弘化四年 一八四七 66歳

嘉永元年 一八四八 67歳

嘉永二年 一八四九 68歳

嘉永三年 一八五〇 69歳

嘉永四年 一八五一 70歳

嘉永六年 一八五三 72歳



正 誤 表

頁数	訂正箇所	(誤)	(正)
11頁	府内行①	初塞	切塞
	府内行②	赤野(白杵)	赤野
18頁	3段目9行～10行	竹田の嗣子である太一 (後の田能村直入)	竹田の実子である如仙 (幼名 太一)
26頁	11南塙 12～13行目	2行削除。	
27頁	13醒齋 読み下し3行目	醒めて	醒め来りて
27頁	14御風主人 白文 3行目	麩魚	麩魚
34頁	No.25の法量	縦横の法量を入替	
36頁	文政四年(一八二一)	西国筋群代	西国筋郡代

平成二六年度 咸宜園教育研究センター特別展
漢詩人 廣瀬淡窓

発行日 平成二六年八月三一日

編集・発行 日田市教育庁 咸宜園教育研究センター
八七七・〇〇一二

大分県日田市淡窓二・二・一八

電話 〇九七三・二二二・〇二六八番

印刷・製本 尾花印刷有限公司



遠思樓

梨雪館

心遠廬

立雪齋

和齋堂

講堂

東塾

高館河宮寇修廊運曲房君
子出戶至難佩響鐸一傳楚
沈荷席陪坐亦對味因有好
文美兼存攝謙光虛室不形
棲素無唯口張銅鐸風聲靜
篆盤相德長固好更清絕祿
水澹池塘圓亭浮淡鏡落甚
漾幽芳軒車將者往乃顧瞻
東方澤情河梁可辛投空澤